

# 学内六報

2026.4.23

no.1605



令和8年度学部入学式で祝辞を述べる野田秀樹様



令和8年度役員等の紹介  
令和7年度卒業式・学位記授与式  
令和8年度学部入学式・大学院入学式  
学生アイデアがランチパックに!  
新連載「一五〇年史編纂室通信plus」スタート

# 令和8年度役員等の紹介

## 総長

藤井 輝夫

## 理事・副学長

相原 博昭 プロボスト 経営企画、病院  
森山 工 シニアバイスプロボスト（教育）、  
学生支援、情報  
玄田 有史 シニアバイスプロボスト（研究）、  
研究力強化  
山本 隆司 CLO（法務）、懲戒、入試・高  
大接続、研究倫理、評価  
林 香里 CGDO（国際、ダイバーシティ  
&インクルージョン）  
津田 敦 総務、150周年記念事業、社会  
連携・産学官協創

## 理事

菅野 暁 CFO（財務、資産活用）  
桑原 昌宏 CRO（リスク管理、コンプライ  
アンス）  
井上 睦子 企画調整、事務組織、人事労務、  
環境安全衛生  
岩村 水樹 コミュニケーション戦略

## 監事

亀井 純子  
山口 大介

## 執行役・副学長

浅見 泰司 教育基盤  
大越 慎一 バイスプロボスト（教育）、コ  
ミュニケーション戦略  
岡部 徹 危機管理  
岸 利治 環境安全、監査  
小関 敏彦 UT/D（UTokyo College of  
Design）設置準備  
坂田 一郎 学術経営インテリジェンス  
佐藤 健二 学術資産活用戦略  
染谷 隆夫 産学連携、スタートアップ  
田浦 健次郎 DX推進、情報システム  
出口 敦 施設・資産活用企画、GX推進

## 執行役

岩垂 廣親 副CFO（財務）、リスクガバナ  
ンス体制整備  
高橋 喜博 CoS（総長業務事務統括）  
福島 毅 CIO（資金運用）  
三島 龍 CDO（事業開発）

## 副学長

秋山 聡 地域連携推進、ファンドレイジン  
グ  
大橋 弘 産学協創  
坂井 修一 図書館  
佐藤 薫 多様性包摂共創センター、ダイバ  
ーシティ教育、SOGI 多様性  
星 岳雄 東京カレッジ  
真船 文隆 学生エンゲージメント、相談支援  
研究開発センター、学部教育改革  
矢口 祐人 グローバル教育センター、UT/D  
（UTokyo College of Design）設  
置準備推進  
吉江 尚子 ダイバーシティ研究環境実現、ハ  
ラスメント防止

## 副理事

大久保 伸一 リスク・コンプライアンス  
小川 友明 資産活用推進  
藤山 達矢 学修環境整備・学修機会確保  
小寺 孝幸 柏地区事務機構、イノベーション  
コリドー  
櫻井 明 社会連携・産学官協創、GX推進  
平野 裕士 UT/D（UTokyo College of Design）  
松井 正一 ダイバーシティ&インクルージョン  
推進  
渡邊 慎二 プロボストオフィス、研究推進

## 総長特別参与

沖 大幹 科学技術外交、グローバルビジ  
ョン形成、GX教育、GX国際連携  
喜連川 優 大学システムにおけるAI戦略  
鈴木 綾 グローバルビジョン形成推進

## 総長特使

石井 菜穂子 Global Commons（グローバル  
コモンズ）  
道田 豊 The UN Ocean Decade（国連海洋  
科学の10年）

## 総長特任補佐

有馬 孝尚 総長ビジョン検討、学術経営イン  
テリジェンス  
五十嵐 圭日子 社会連携・産学協創推進  
池田 誠 産学協創推進、半導体戦略  
和泉 潔 総長ビジョン検討  
稲見 昌彦 図書館DX推進、クリエイター教  
育推進  
岩田 覚 総長ビジョン検討  
岩田 洋佳 社会起業推進  
江頭 正人 社会連携教育推進  
笥 康明 デザイン／アート連携推進、クリ  
エーター教育推進  
川喜田 敦子 学部教育国際化  
北村 友人 国際戦略企画  
小嶋 大造 学術経営推進、国際卓越研究大学  
構想策定  
齊藤 英治 国際卓越研究大学構想策定  
境家 史郎 学生エンゲージメント推進  
塩見 淳一郎 起業家教育の国際化  
武田 憲彦 学術経営推進、国際卓越研究大学  
構想策定  
田野井 慶太郎 国際卓越研究大学構想策定・  
GD機構準備推進  
鶴見 太郎 総長ビジョン検討  
寺師 弘二 産学協創推進、量子戦略  
中尾 彰宏 次世代サイバーインフラ活用、産  
学協創推進  
額賀 美紗子 入試企画  
野村 政宏 国際研究推進  
ペニンントン マイルス デザインビジョン、  
UT/D設置準備推進  
福留 東土 学術長期構想検討、UT/D設置準  
備推進  
松田 陽 学術資産活用推進、150周年記念  
事業推進、総長ビジョン検討  
求 幸年 起業家教育の国際化  
両角 亜希子 総長ビジョン検討、新しい大学  
モデル構想推進  
八木 俊介 経営企画推進  
脇原 徹 安全保障輸出管理支援、企業リエ  
ゾン  
割澤 伸一 産学協創・社会連携推進、イノベ  
ーションコリドー推進



# 新役員等の略歴と就任挨拶

## 盾もしくは防波堤として

東京大学は、国際卓越研究大学の第2期公募に応募し、現在、継続審査の段階にあります。昨年度は、執行役・副学長として国際卓越研究大学構想の取りまとめを担当いたしました。認定を得られず、本当に申し訳なく思っています。審査を通過し、今度こそ認定を得られるよう、取り組んでまいります。みなさまの引き続きのお力添えをお願いします。

今年度より本学では、教育研究の高度化と持続的発展に向け、全学的な戦略の策定および実施を担う「学術経営本部」が新設されました。設置に際し、このたび副本部長として、GRI・研究部門担当のシニアバイスプロボストを拝命

しました。本学の研究に寄せられる期待に応えるべく、研究環境の整備に力を尽くしてまいります。

プロボストという語は、ラテン語の「前に置かれた者」に由来するとされています。今後も東京大学は、研究教育を取り巻く厳しい環境のなか、さまざまな困難に直面することがあるかもしれません。前面に立つプロボストを支え、いかなるときも本学の盾もしくは防波堤として研究者とスタッフを守り抜くことが使命と認識しています。

もとより至らぬ点が多いですが、今後とも忌憚のないご意見・ご提案を期待しています。

## 世界の公共性に奉仕する東京大学のために

東京大学憲章の冒頭に、東京大学が「世界の公共性に奉仕する」ことが謳われています。このフレーズは、真摯な研究で世界の公共性に奉仕しないものがあるのかと問えば、当然のことを語るだけのように思われます。しかし、公共性とは何かは、それ自体が研究テーマであり、永遠の問いでもあります。私の考えるところ、自由な個人が社会を形成する何段階・何重ものプロセスが、世界の公共性に必須の要素です。こうした世界の公共性を構成する複雑なプロセスを認識し、こうしたプロセスの中における研究活動の役割と大学組織の運営のあり方を考えることが、東京大学が世界の公共性に奉仕するための基礎になります。

私が担当する法務・ガバナンスは、既存の規

則による取締りのように誤解されることがあります。しかし、法務・ガバナンスは、世界の公共性のために、UTokyo Compass 2.0が標題とする「対話」により不断に創っていくものです。現実社会には、世界の公共性に奉仕する営為とは逆の傾向も見られ、こうした営為を意図的に妨げる動きさえ見られなくはありません。東京大学が世界の公共性に奉仕しているかという点についても、残念ながら厳しい目が向けられています。私自身は微力ですが、皆さんと力を合わせて、こうした困難の中にあるからこそ、東京大学憲章の基本に立ち返り、対話による創造の仕事ができればと思います。どうかよろしく願いいたします。

## CRO 就任にあたって

新たに設けられた理事・CRO (Chief Risk Officer) に今般就任しました。

1986年3月に本学法学部を卒業し、当時の三菱銀行に入行。銀行では主に企画部門、海外業務、リスク管理を経験し、海外生活は留学に加え、シカゴ、バンコク、ロンドンと計13年。銀行業務は常にリスク管理と背中合わせですが、この分野では融資企画部長のほか三菱UFJフィナンシャル・グループ (MUFG) 全体のリスク管理を統括する「グループCRO」も約3年間務めました。また、その後MUFG内で証券会社に移り、銀行とは別の角度から金融業務に携わる機会も得、来し方を振り返ると、まずは充実したビジネスマンとしての日々でした。

卒業して40年。今度は大学経営に関わる立

場で東大に戻ってくるとは夢にも思わず、不思議なご縁を感じています。久しぶりに本郷に足を踏み入れましたが、キャンパスの光景にも心なしか学部生時代とは異なった印象を抱きます。

日本の大学ではCROはまだ馴染みがないかもしれませんが、その守備範囲、リスク管理・コンプライアンスに係る重点課題は組織によって異なります。CROとして金融機関時代とは異なるテーマにも向き合うことになると思っており、本学の課題をしっかりと把握し、皆さんからご協力を頂きながら大学に相応しいリスクガバナンス体制構築のため尽力して参ります。どうぞよろしく願いいたします。

理事・副学長

玄田有史  
GENDA Yuji



昭和63年3月 本学経済学部卒業  
平成4年3月 本学経済学研究科第II種博士課程退学  
平成19年4月 本学社会科学研究所教授  
令和3年4月 本学社会科学研究所長  
令和6年4月 本学副学長  
令和7年4月 本学執行役・副学長  
専門分野: 労働経済学  
研究内容: 1) Genda, Yuji, Kondo, Ayako & Ohta, Souichi. "Long-term Effects of a Recession at Labor Market Entry in Japan and the United States." *Journal of Human Resources* 45 (2010): 157-196. 2) Genda, Yuji. "Jobless Youths and the NEET Problem in Japan," *Social Science Japan Journal*, 10 (2007): 23-40.  
趣味: 散歩すること、ラジオを聴くこと

理事・副学長

山本隆司  
YAMAMOTO Ryuji



昭和63年3月 本学法学部卒業  
昭和63年4月 本学法学部助手  
平成3年8月 本学法学政治学研究所助教授  
平成16年9月 本学法学政治学研究所教授  
令和4年4月 本学法学政治学研究所長・法学部長  
令和7年4月 本学運営方針会議委員  
専門分野: 行政法  
研究内容: 1) 山本隆司「行政上の主観法と法関係」有斐閣、2000年 2) Yamamoto, Ryuji. "Die demokratische Legitimation der Verwaltung in Japan." *Jahrbuch des öffentlichen Rechts N.F.* 65 (2017): 849-876.  
趣味: 音楽鑑賞

理事

桑原昌宏  
KUWAHARA Masahiro



昭和61年3月 本学法学部卒業  
昭和61年4月 三菱銀行入行  
平成7年5月 カリフォルニア大学バークレー校MBA修了  
平成24年6月 三菱東京UFJ銀行 執行役員 融資企画部長  
平成26年5月 同 執行役員 国際企画部長  
平成27年5月 同 執行役員 欧州本部 副本部長 (特命担当)  
平成28年5月 同 常務執行役員 欧州本部長  
令和元年6月 三菱UFJ銀行取締役常務執行役員CRO・主たる審査所管役員 兼 MUFG執行役常務グループCRO  
令和2年4月 同 取締役専務執行役員 兼 MUFG執行役専務  
令和4年4月 三菱UFJ証券ホールディングス取締役副社長 兼 三菱UFJモルガン・スタンレー証券副社長  
趣味: 自己流のピアノ

## 東大がその使命を果たすために全力を尽くす

この度、理事（企画調整、事務組織、人事労務、環境安全衛生）を拝命しました。これまで、官公庁では、文部科学省、内閣府、在ブラジル日本国大使館において、国公立大学の制度・予算、研究・イノベーション力の向上、国際協力関係の向上などに携わってきました。また、本学への勤務はこれが3回目となります。職業人生において今日の私があるのも、本学における勤務で、世界をリードする研究者、教育者たる先生方からの厳しくも温かい教えと、熱意と実力ある職員の方々との協働があってこそと、感謝しております。

東京大学は、現在、社会から非常に厳しい批判をいただき、将来への発展に向けた活動基盤が本当に備わった組織に変わるのか、社会から注視されています。このような状態に至ったプ

ロセスについては、外部の弁護士の方々によるプロセス検証委員会で検証いただきました。本学の素晴らしい学生や教職員の方々が、何らかのリスクにさらされた際に、全学でしっかり対応できるよう、そして、社会からの信頼を取り戻すことができるよう、総長はじめ理事や執行役、副学長、監事一同、全力でガバナンスの強化に向けた改革を進めようとしているところです。そんな困難な時期での赴任となり、今こそ、職業人としてここまで自分を育ててくださった東京大学に御恩返しをすときと、強い気持ちで仕事に臨んでおります。

東京大学の使命を果たすため、学生さんや教職員の方々が伸び伸びと安心して活動できる環境の構築に向けて、力を尽くします。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

## 世界に冠たる高度人材育成のための大学教育環境の整備

この度、執行役・副学長（バイスプロボスト（教育）、コミュニケーション戦略）を拝命いたしました。大学院改革、入試企画室、コミュニケーション戦略本部、WPIを担当いたします。昨年度まで、理学系研究科・理学部長と総長特任補佐（副学長待遇）として、教育・研究活動の環境の向上に携わってまいりました。理学系では、共同指導型博士ダブル・ディグリー・プログラムの実装をはじめ、グローバルサイエンスコース、国際卓越大学院コース、グローバルスタンダード理学など国際教育プログラムの充実、各種海外インターンシップの拡充などに取り組んでまいりました。また、「グリーントランスフォーメーション（GX）」を先導する高度人材育成（SPRING GX）」の事業統括として、博

士課程学生の支援を行っております。目を輝かせて研究に取り組む学生たちに接する中で、本学の未来への確かな可能性と希望を強く感じております。

今後は、総長、相原理事、森山理事、玄田理事のもと、バイスプロボスト（教育）として、世界に冠たる高度人材育成の教育環境の整備に努めてまいりたいと存じます。また、入試企画室長として、学部入試、大学院入試の未来を検討すると共に、コミュニケーション戦略本部長として、岩村理事のもと、東京大学の魅力と本学の教育・研究の成果を、国内外へ効果的に発信してまいりたいと存じます。

何卒宜しくお願ひ申し上げます。

## 学術経営インテリジェンス機能の確立に向けて

このたび、学術経営インテリジェンスなどを担当する執行役・副学長を拝命致しました。

これまで総長特別参与として、ビジョン形成、アカウントビリティ、アントレプレナーシップ教育等を担当してきました。それらに携わるなかで、学外では、ますます深刻化する地球的課題の解決に関し、グローバルな文化・経済の交差点であるアジアで培われてきた本学固有の知に対する国際社会からの期待の大きさを感ずるとともに、学内では、独創的な研究と社会的起業によって課題解決に貢献しようとする若い人材のコミュニティが大きく広がっていくのを目の当たりにしてきました。

今、本学は、喫緊の社会的デマンドに応え、現場に蓄積された力を最大限に引き出せるよう

にする環境整備を一挙に進めるタイミングと考えます。その際、藤井総長のコンセプトである「責任ある自在化」が鍵となります。

それを牽引する組織として学術経営本部が設置されたところであり、仕組みの整備も進みつつあります。学術経営を効果的に駆動させるためには、世界の先端研究の潮流や新領域の創成、それらを主導している人材、あるいは課題解決に欠かせない知見の組み合わせなど、知の供給と需要に関する情報のインプットが欠かせません。実空間で活躍する専門家経由で入手する手触り感のある情報と大規模な学術データ等の分析から得られる知見とを適切に組み合わせた学術経営インテリジェンス機能の確立に微力を尽くしてまいりたいと思います。



理事

### 井上睦子

INOUE Mutsuko

平成8年3月 学習院大学法学部卒業  
平成8年4月 文部省入省  
平成22年4月 在ブラジル日本国大使館一等書記官  
平成25年1月 本学国際部長  
平成26年4月 文部科学省大臣官房国際課国際戦略企画室長  
平成28年7月 同高等教育局大臣官房国際課国際戦略推進室長  
平成29年7月 同高等教育局私学部参事官  
平成30年10月 同高等教育局私学部私学助成課長  
令和2年4月 同初等中等教育局幼児教育課長  
令和3年1月 内閣府参事官（オープンイノベーション担当）（政策統括官（科学技術・イノベーション担当）付）  
令和3年7月 文部科学省科学技術・学術政策局産業連携・地域支援課長  
令和5年7月 同高等教育局国立大学法人支援課長  
令和7年7月 同科学技術・学術政策局政策課長（命）科学技術・学術統括官  
趣味：海釣り、音楽鑑賞・演奏（ピアノ）



執行役・副学長

### 大越慎一

OHKOSHI Shinichi

平成元年3月 上智大学理工学部卒業  
平成7年3月 東北大学大学院理学研究科博士課程修了 博士(理学)  
平成7年4月 財団法人神奈川科学技術アカデミー研究員  
平成9年9月 本学先端科学技術研究センター助手  
平成12年9月 同先端科学技術センター講師  
平成15年4月 同先端科学技術センター助教授  
平成16年7月 同大学院工学系研究科助教授  
平成18年4月 同大学院理学系研究科教授  
専門分野：物理化学、物性化学  
研究内容：1) Ohkoshi, Shin-ichi, Nakagawa, Kosuke, Imoto, Kenta, Tokoro, Hiroko, Shibata, Yuya, Okamoto, Kohei, Miyamoto, Yasuto, Komine, Masaya, Yoshikiyo, Marie, Namai, Asuka. "A photoswitchable polar crystal that exhibits superionic conduction." *Nature Chemistry* 12 (2020): 338-344. 2) Ohkoshi, Shin-ichi, Takano, Shinjiro, Imoto, Kenta, Yoshikiyo, Marie, Namai, Asuka, Tokoro, Hiroko. "90-degree optical switching of output second-harmonic light in chiral photomagnets." *Nature Photonics* 8 (2014): 65-71.  
趣味：読書



執行役・副学長

### 坂田一郎

SAKATA Ichiro

平成元年3月 本学経済学部卒業  
平成9年5月 ブランダイス大学国際経済・金融学大学院修了  
平成15年11月 本学より博士号（工学）取得  
平成25年7月 本学工学系研究科教授  
平成26年4月 本学政策ビジョン研究センター長兼務  
令和2年4月 本学副学長  
令和3年4月 本学総長特別参与  
専門分野：計算社会科学、科学の科学  
研究内容：1) Higashide, Noriyuki, Asatani, Kimitaka, Sakata, Ichiro. "Quantifying advances from basic research to applied research in material science." *Technovation* 135 (2024): 103050. 2) Miura, Takahiro, Asatani, Kimitaka, Sakata, Ichiro. "Revisiting the Uniformity and Inconsistency of Slow-cited Papers in Science." *Journal of Informetrics* 17 (1) (2023): 101378.  
趣味：古代史に関する読書と史跡巡り



## みんなの「居心地のよさ」からはじまる共創

このたび多様性包摂共創センター(IncluDE)・ダイバーシティ教育・SOGI多様性担当の副学長を務めることとなりました理学系研究科の佐藤薫です。歴史と伝統ある本学において、このような役割を担う機会をいただきましたことに、心より感謝申し上げますとともに、その責任の重さを改めて感じております。

私はこれまで、南極大型レーダーや高解像度モデルを用いながら、宇宙の下端と呼ばれる高度約100kmにまで広がる大気の大循環やこれを駆動する大小様々な大気波動の物理学について研究を進めてきました。日本南極地域観測隊の越冬隊員として、厳しい環境で約1年過ごす中、時に支えられる側となり、また別の場面では支える側になるという、互いの弱み強みを包摂して協働する重要性を実感しました。

こうした経験から、多様な背景や個性を持つ人々が互いを尊重しながら対話し、それぞれが能力を活かせる環境や意識の大切さを強く感じております。IncluDEのセンター長として、本学が掲げるUTokyo Compassの三つの視点の一つである「場をつくる」、すなわち「世界の誰もが来なくなる大学」の実現に向け、どなたにとっても居心地がよく、自らの力を存分に発揮できる環境を整えていきたいと考えております。多様性と包摂は、大学という集団全体としての視野を広げ、新たな発想や価値の創出につながるものだからです。

微力ではございますが、本学のさらなる発展に向けて、みなさまとともに取り組んでまいります。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



副学長

佐藤 薫

SATO Kaoru

昭和59年3月 本学理学部卒業  
昭和61年3月 本学理学系研究科修士課程修了  
平成3年3月 京都大学理学研究科博士課程修了 理学博士  
平成5年4月 本学気候システム研究センター助手  
平成7年4月 京都大学理学研究科助手  
平成11年12月 国立極地研究所北極圏環境センター助教授  
平成16年4月 国立極地研究所研究教育系助教授  
平成17年10月 本学理学系研究科教授  
平成23年4月 本学総長補佐  
令和2年4月 本学総長特任補佐  
令和5年4月 本学理学系研究科副研究科長  
専門分野：大気物理学  
研究内容：1) Sato, K., 他9名, Program of the Antarctic Syowa MST/IS Radar (PANSY) (2014), *J. Atmos. Solar-Terr. Phys.*, 118, PartA, 2-15. 2) Sato, K., 他28名 (2023), Interhemispheric Coupling Study by Observations and Modelling (ICOM): Concept, Campaigns, and Initial Results. *J. Geophys. Res. Atmos.*, 128, e2022JD038249.  
趣味：ピアノ

## 「世界の東京大学」となるために

「本学が危機的な状況にある」と、藤井輝夫総長が認識を示されました。多くの教職員が同様の危機感を抱いたものと思います。私自身も、東京大学の職員として37年を過ごす中で、これまでに経験したことのない状況に直面していると感じています。

大学という最高学府におけるリスクとは何かを考えると、教育・研究、社会貢献といった本来の使命に関わる領域だけでも、さまざまなリスク因子が思い浮かびます。さらに、人事、財務、施設といった法人業務も含め、本学のあらゆる活動にリスク因子が内在しており、挙げだせばきりがありません。こうしたリスクの顕在化を全て回避することは、現実には難しいでしょう。しかしながら、リスクの大小にかかわらず、そ

の顕在化を想定し、その時に何をなすべきかを日頃から考えておくことにより、被害を最小限にとどめることは可能であるはず。外部の委員会は、危機意識が不十分であったことなどを指摘していますが、この指摘は、本学の教職員一人一人が自らの課題として受け止めるべきものと認識しています。

このような状況の中、私はリスク・コンプライアンスを担当する副理事を拝命し、リスク・コンプライアンス統括部長を兼務することとなりました。微力ではございますが、東京大学のレピュテーションの回復に努めるとともに、「世界の東京大学」となるための教育・研究を支えるべく、全力を尽くす所存です。何卒よろしくお願い申し上げます。



副理事

大久保伸一

OKUBO Shinichi

昭和63年5月 本学採用  
平成25年12月 教養学部等総務課長  
平成30年4月 経営企画部秘書担当課長  
令和2年4月 経営企画部経営戦略課長(兼務)  
令和3年4月 法学政治学系研究科等事務長  
令和5年4月 教養学部等事務部長  
趣味：車、カメラ

## 新しいことへの挑戦

このたび、副理事としてプロボストオフィスと研究推進を担当することになりました渡邊です。

「プロボスト」という言葉は耳慣れない方も多いと思いますが、私もその一人でした。本学の規則によるとプロボストの職務とは「東京大学の教育研究に係る企画、戦略及び運営並びにそれらに必要な学内資源の管理及び配分を統括する」となっています。本学では本年度より新たに設置されたものであり、教学運営に関する権限の多くが総長より委譲されています。

このような新しい体制のもとで業務に携わる

ことはたいへん身の引き締まる思いです。

重要な職責を担うプロボストを支えるプロボストオフィスの一員として、職務に邁進する所存です。

私自身は本年3月に役職定年を迎え、4月から副理事として再出発することとなりますが、新しいことへの挑戦であると胸を弾ませております。このような貴重な機会を与えていただいたことに感謝し、重責を果たすために全力を尽くしたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。



副理事

渡邊慎二

WATANABE Shinji

昭和59年4月 本学採用  
平成26年4月 本部渉外・基金課長  
平成28年4月 工学系・情報理工学系等財務課長  
平成31年4月 宇宙線研究所事務長  
令和4年4月 理学系研究科等事務部長  
令和6年4月 工学系・情報理工学系等事務部長  
趣味：街なか散歩

# 退任の挨拶

## 研究力強化と基盤整備に取り組んだ5年間

理事・副学長としての5年間、格別のご支援とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。私は主として研究、懲戒、病院を担当し、研究推進、大学院改革、環境安全衛生、研究インテリジェンス、研究インテグリティ、IRデータ、WPI、図書館、総合研究博物館など幅広い分野に携わってまいりました。

着任当初はコロナ禍の最中であり、学内ワクチン接種拠点の設置・運営が大きな課題でした

が、関係部署の皆さまのご尽力により円滑に進めることができました。研究面では、国際卓越研究大学への申請を見据え、学術経営本部や研究インテリジェンス体制の整備に向けた検討、研究DXの推進に取り組ましました。また、研究インテグリティやセキュリティ対応、DORA署名、Kavli IPMUやIRC等WPI拠点の活動支援、新世代感染症センターの設置、大学院支援プログラムとしてWINGSやWISEに加え、SPRING GX、

## 前理事・副学長 齊藤延人

BOOST NAIS等によるその拡充なども重要な成果であったと考えております。

懲戒手続の迅速化や、病院運営における財務改善などまだまだ課題も残っていますが、多くの方々に支えられ職責を全うできましたことに深く感謝申し上げますとともに、本学のさらなる発展を心より祈念し、退任のご挨拶とさせていただきます。

## 学生支援、入試・高大接続、研究倫理、評価

標記の仕事を5年間務めました。

最も大変だったのは、コロナ禍下の入試の追試作成問題です。「罹患者の受験機会は、これを保障する」とだけ11月に公表し、2月に共通テストを使うことを公表、3月の記者発表では30ページにわたるQ&Aを準備しました。また20年ぶりの学費改定を受けて、学生の声を聞く制度検討WGを立ち上げ、座長の真船先生におまといいた

だきました。2022年東京六大学野球始球式で投げたこと、2023年度主幹校としての七大戦優勝は、忘れがたい思い出です。

研究倫理では、UTokyo Compassおよび第4期中期目標中期計画にある「ELSIおよびRRI」を各部局のセミナーに埋め込むために、9月の全学セミナーの実施、次の年の2-3月に各部局の発表会、その中のグッドプラクティスを次の9月の全学セ

## 前理事・副学長 藤垣裕子

ナーで紹介、というループを4回まわしました。各部局の間での相互の学びあい、担当の先生方の吸収力と応用力の高さには目を瞠りました。

本学には各分野の最先端の学問を展開している魅力的な先生がたが多くいます。その先生がたの研究がさらに発展するように、国際卓越研究大学の審査が無事通過し、過渡期の制度設計がうまくいくことを祈っています。

## 新しい東京大学への期待と祈り

5年間副学長として務め、その間、情報システム本部長や教育担当、IRデータ室・大学ランキング対応、入試企画室、国際卓越研究大学、UTokyo College of Design設立の学内調整の担当などを担いました。

教育では生成AIの登場に際し、早期に声明を発表したために社会的に大きな反響がありました。現在の生成AIの進歩をみますと、当時の「ルビ

コン川を渡る」という表現もあながち大げさではなかったと思います。

学内WIFIや多要素認証などの学内の情報基盤の整備も進み、大学ランキングも皆様のご尽力で任期中に順位が改善され、入試企画室で今後の入試改革の議論も進みました。

国際卓越研究大学の1回目の申請は、皆様に変なご尽力をいただいたものの、採択に至らな

## 前執行役・副学長 太田邦史

ったことは大変残念でした。現在も採択に至っていませんが、本来十分な資格がある大学ですので、必ずや採択に至ると信じています。

UTokyo College of Designは、小関先生はじめ教職員の皆様のご尽力により、まもなく日の目を見ます。東京大学としては画期的な教育変革になりますが、この運動を通じて東京大学の新たな未来が展開することを心より祈念いたします。

## 広報からコミュニケーションへ

2023年から3年間、コミュニケーション戦略の推進を担当しました。

東京大学が「世界の誰もが来なくなる大学」となるためには、本学に対するこれまでのイメージを矯正し、良き理解者やサポーターを増やすことが肝要です。さらに海外では、まずは知名度の飛躍的な向上が不可欠だと思います。本学の持つ高い可能性や多様な魅力をより広く知ってもらうためには、こちらの伝えたいことを一方的にばらばら

に発信するというこれまでの広報のスタイルから、一貫性を持ちながらもオーディエンスに応じた双方向的なコミュニケーションへの転換を図る必要があります。

そのため私たちは、これまでの活動を継続しながらも、数年をかけて活動内容の全面的な見直しを進め、2025年4月には広報戦略本部を全面改組してコミュニケーション戦略本部を立ち上げました。新しい本部には、コミュニケーションやブ

## 前執行役・副学長 河村知彦

ランド戦略に関する外部の専門家や関心のある学生の皆さんにもご参画いただき、様々な新しい活動が始まっています。

まさにこれから、という時に本学から離れることとなり、たいへん残念ではありますが、今後は、東京大学が「世界の誰もが来てよかったと思える大学」に変身していく様子を外から応援していきたいと思います。3年間、関係する多くの皆様に大変お世話になりました。ありがとうございました。

## 大学のコア・バリューをいかす制度改革

2021年度に執行役・副学長を務めた後、2022年度に総長特別参与、2023年度に副学長、2024年度から2年間、再び執行役・副学長を務めました。

この間一貫して担当した分野はガバナンス改革です。総長選考・監察会議の組織・運営の見直し、国立大学法人法改正に伴う運営方針会議の制度設計、UTokyo Compassが掲げる「新しい大学モデル」にふさわしいプロボストや学術経営本部、責任ある執行部体制の構築等に取り組みました。これらの議論で私が大事にしたのは、実際に効果的にワークする制度とすること、及び、「学問

の自由」や「大学の自治」といった大学制度を支えるコア・バリューと整合的な制度とすることの2点です。大学もまた社会の中に存立している以上、様々な社会的要請に誠実に応答することは当然です。しかしその際、大学として主体的に価値選択をすること、社会的要請に応えつつ、同時に大学を大学たらしめている価値を創造的に発展させることに心がけました。

そのほか、相談支援、コンプライアンス、ハラスメント防止なども担当しました。センター長を務めた相談支援研究開発センターでは、現在、従

## 前執行役・副学長 佐藤 岩夫

来からの個別支援に加えて、キャンパスを一つの「コミュニティ」として捉え直し、構成員全員のウェルビーイングを育んでいく野心的な試み（キャンパス・ウェルビーイング）を開始したところで、今後の発展を楽しみにしています。

この間大変お世話になった藤井総長、役員、本部事務部、全学の皆さまに心から感謝を申し上げますとともに、本学が今後益々の発展を遂げることを願っております。

## DEI推進を目指して

2022年度から5年間、副学長としてダイバーシティ教育を担当、2024年度からは多様性包摂共創センター（IncluDE）とSOGI多様性が担当に加わり、東京大学のDEI（多様性、公正性、包摂性）推進を目指してきました。UTokyo Compassの中心にDEI推進を位置付けた藤井輝夫総長とD&I担当の林香里理事の強力なリーダーシップの下、全教職員対象の必修研修や大学・部局の執行部教職員を対象とする対面研修の実施、SOGI

多様性関連の対応について疑問や悩みを持つ教職員向けの相談窓口開設・運営など、構成員の意識変容・行動変容につながる取り組みを進めることができました。また、支援の現場の声を大学執行部に届けることも重要な役割でした。

IncluDEの開設前準備から開設後最初の2年の運営を、関係の教職員とともに議論しながら進めることができたことは、私にとって得難い経験になりました。何より、この5年間で大学・部局執

## 前副学長 伊藤 たかね

行部のDEI意識が確実に変化してきたこと、そしてそれをリアルタイムで経験できたことを、大変ありがたく思っています。

積み残した課題はたくさんありますが、IncluDEが全学の他部局と協力し、着実に取り組んで参りますので、引き続きIncluDEへのご理解・ご支援をよろしく願いたします。

## 課せられたルールに対する意識を一層高めて

2021年4月より副理事として5年間勤めてまいりました。主たる業務がとてもデリケートなことを扱うものであるため、多くの方々に支えられながら、ご協力を頂きながら、どうにか任期満了を迎えることができました。

本学は、新たな知の創出や知の探求等々、とてもすばらしいものがたくさんあることは周知の事実であります。

そのため、それらの活動を支えるための大きな財務的基盤等々があります。一方、それらを使用するために課せられたルールというものの存在があり、それをないがしろにするわけにはなりません。

今後、そのルールがどのように変化してくのかは、ある意味、それはそのルールを課せられている教職員の意識次第だと思われま

## 前副理事 遠藤 勝之

昨今の、社会からの大変厳しい目に応えるためにも教職員全員の意識をより一層高める必要があると思われま

それは、大変難しいことではなく、ちょっとした心がけだけでかわるものだと思います。

今後の、本学のより一層の発展のためにも、どうぞよろしく願いたします。

## 難題を乗り越えて

2021年4月より最初の2年間は情報システム担当、副理事兼情報システム部長として、まだコロナ禍にあり、オンライン授業や学内のネットワーク整備に奔走させていただきました。皆様のご協力、執行部による積極的な支援により、本学のIT環境は飛躍的に向上しました。

それと同時に、やらなければならないことが次々と判明しました。IT環境は常にアップデー

トし、今後も整備を続ける必要があります。学習環境の充実もまさにこれからです。その後、DX推進と柏地区事務機構長を兼ねて業務を行い、多くの方々に支えられて職務を遂行することができました。DX推進は財政状況が厳しい中、それでも業務の改善に多くの知恵と工夫が寄せられており、これから形になっていくと確信しています。柏キャンパスも移転してすでに20年が経過し、

## 前副理事 水上 順一

建物を含むインフラが大規模修繕を待っている状況です。柏IIキャンパスも建物が増え、活発な研究活動が展開されています。

本学は国際卓越研究大学認定、ガバナンス改革など難しい課題が山積ですが、これまでも様々な難題に立ち向かい、乗り越えてきました。もっと強い組織になることを祈念し、退任の挨拶とさせていただきます。

## 産学連携と社会人教育から新たなミッションの創出を

東京大学TLOの社長に2000年に就任して以来、副理事、ならびに東京大学エクステンション代表取締役社長として、通算26年にわたり東京大学に関わる機会を頂戴してまいりました。

私は産学連携を専門としており、副理事としては、ダイキン東大Lab、ソフトバンクとのBeyond AI、クボタ東大Labの企画・運営や、TLO時代から継続してきた大学発スタートアップ支援などに主として携わってまいりました。一方で、大学

経営の中枢に深く関与する立場ではありませんでしたが、長きにわたり貴重な経験を積ませていただいたことに、心より感謝申し上げます。

このたび副理事を退任いたしますが、東京大学エクステンションの代表取締役社長としての役割は引き続き担ってまいります。生成AI、ゲノム編集、量子コンピュータなどの急速な技術革新により、産業構造や働き方は大きな転換期を迎えています。こうした、私たちが学生時代に学ぶ機会

## 前副理事 山本 貴史

のなかった新たな知と視座を大学から社会に発信することは、大学の役割を拡張し、産業界や社会との新たな関係を築くことにつながると信じています。リカレント・リスキリングを通じ、東京大学ならではの社会人教育の普及と新たなミッションの創出に尽力してまいります。

今後とも変わらぬご指導を賜りますよう、よろしく願申し上げます。



# 令和7年度学位記授与式

令和7年度東京大学学位記授与式が、3月24日(火)に、安田講堂において挙行されました。今年度の学位記授与式も第一部・第二部・第三部の3回に分けて挙行され、音楽部管弦楽団によるモーツァルト作曲「アイネ・クライネ・ナハトムジーク 長調 K.525」の演奏が流れる中、総長をはじめ、理事、研究科長、研究所長並びに来賓の國部毅 東京大学校友会会長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となりました。藤井輝夫総長から各研

究科の修了生代表に学位記が授与され、修了生に向けて告辞が述べられた後、来賓の國部東京大学校友会会長から祝辞をいただきました。その後、修了生総代（第一部：農学生命科学研究科 田中翔大さん、第二部：教育学研究科 堀川優弥さん、第三部：情報理工学系研究科 三木章寛さん）から答辞が述べられ、式を終えました。式典の様子はインターネットを通じてライブ配信され、修了生とそのご家族を含む、多くの方にご覧いただきました。



## 総長告辞



本日、東京大学から学位を受けられるみなさん、おめでとうございます。東京大学を代表して、みなさんの大学院生活を支えてくださった、ご家族や関係の方々にも深く感謝し、お祝い申しあげたいと思います。

今日は、みなさんの大学院修了を祝う日ではありますが、昨年から東京大学をめぐる報道されている不祥事が、気にかかっている方も少なくないかもしれません。みなさんにもご心配やご迷惑をおかけしたことを、あらためてお詫びいたします。度重なる事件を未然に防ぐことができなかつた経緯を深く反省し、大学として望ましいガバナンスの仕組みや、あるべき危機管理体制を再構築すべく、いま断固たる決意で取り組んでいるところで。

そうした自戒を込めて、遠い未来から振り返ったとき、自分たちの今ここでの選択が、

どのように評価されることになるのか、そのことを考えてみよう、という話をしたいと思えます。

『グッド・アンセスター』というタイトルの本が近年、話題になりました。人類文化史を論じてきた思想家ローマン・クルツナリクの現代社会論であり、「私たちは未来世代から立派な祖先だったと、評価されるようになるだろうか」と問いかけています。

現代の生活はまことに便利で、インターネット上の世界が拡張してSNSが普及し、世界の動きをニュースですぐに知り、時間を問わずネットで買い物ができ、気になった店の情報や評価なども、すぐに調べられます。そこで批判されるのが、現代の人間と社会とが陥りがちな、短期的な価値観と思考です。問題を解決するにあたって、目先の利益にこだわり、いま感じている欲求の充足を優先してしまう、自分ファーストな考え方が、現在、世界のあちこちで分断と対立を激化させています。そのことを考えれば、これはじつは大きな問題でもあります。

クルツナリクは、短期思考によって生みだされたリスクとして、自然環境の破壊や地球温暖化、気候変動、核廃棄物の処理などを挙げています。そして「私たちは未来を植民地化してきた」と述べて、長期的で公共的な

視座の欠如を鋭く批判します。すなわち、近代の資本主義が、未開発の外部にさまざまな問題を押しつけて発展してきたように、本来であれば次世代と共有すべき資源を浪費し、問題の解決を未来に先送りすることで、現在の豊かさや便利さを優先させてきたのではないのか、と問いかけます。

そのようなわれわれに対して、まだ存在していない未来世代は、意見を言うことも抗議することもできません。

クルツナリクの問いが踏まえていたのは、医学者ジョナス・ソークの「私たちのもっとも大きな責任は、よき始祖となることだ(Our greatest responsibility is to be good ancestors)」ということばです。ソークは、1955年に小児麻痺を引き起こすポリオウイルスに対するワクチンを開発しますが、このワクチン開発において、知的財産権を主張しなかったことでも有名です。「だれも太陽の光に特許を申請しないでしょ」と述べて、私的に排他的な利益を求めませんでした。このような献身的な姿勢が原動力となり、今では世界のほぼすべての国で、ポリオは根絶に近づいています。

未来から評価される先駆者という話に、みなさんは、あまりピンとこないと思うかもし

れません。未来がどうなるかは、わからないからです。あるいは、自分たちの未来はもっと悪くなるだろうと確信し、どうにもならないところに進んでいくのではないかと、という諦めすら抱いているかもしれません。たしかに、将来という時間には、まだ決められていないがゆえの自由と、なにも約束されていないがゆえの不安との、両方が混じり合っています。

しかし、未来はみなさんの頭のなかの、空想でしかない仮想世界ではありません。自分たちの行為が作り出し、歩いていく前途でもあります。だからこそ、自分や社会の未来に、望ましい目標としての形を与えること、すなわちデザインすることが大切になります。

「立派な祖先になれるか」という問いは、つまり、みなさんがどんな人間になりたいのか、そして、どんな社会で生きてゆきたいのか、を問うているのです。

私は、2021年の入学式式辞において、蓄積された研究の知を生かして社会課題に挑み、「工学の最先端の研究を実社会と結び付ける」ための手法として、「デザイン」という概念が重要であることを提起しました。

デザインということばに、図案や模様、あるいは見映えのいい服の制作を思いうかべるかもしれません。しかし、それは現代消費社会に限定された、狭い意味にすぎません。分野をこえたさまざまな研究者が、もっと根本的なとらえ方を提案しています。

評論家のアリス・ローソンは、デザインとは変革することであると述べ、経済学者で認知科学者でもあるハーバート・サイモンは、望ましい状態と現状とのギャップを埋めようとする、問題解決行為こそがデザインだと定義しています。

また、哲学者のドナルド・ショーンは、問題解決をさらにさかのぼって、複雑に変化しつづける状況を名づけたり、意味づけたりして、解釈の枠組みを与え、問題を新たに設定することこそが、デザインだと規定しています。

デザインは、状況から「問題」を見いだし、対象を認識する枠組みを設定し、解決するための資源や方法を見さだめ、よりよい方向に進めることだと考えられます。それは、みなさんが学んできた学問の本質そのものであるといってもよいでしょう。そして、ソークのポリオワクチン開発も、じつは創造的なデザインの実践だったことがわかります。

一方で、『グッド・アンセスター』の問いかけにはもうひとつ、短期的な思考や価値に対する重要な問題提起がふくまれています。そこでは、先送りの対症療法でしかない解決や、その場での欲求の充足にとどまっ

うだけの対策が、のりこえるべきものとして批判されています。

問題解決をめぐるたいへん興味深い論点を、アメリカの強制収容所での流言浮説を研究した社会心理学者のタモツ・シブタニが指摘しています。シブタニは、流言を異常な病理現象としてではなく、「即興的につくられたニュース (improvised news)」であり、その場かぎりの問題解決であった、ととらえます。

つまり、荒唐無稽なうわさ話は、情報が遮断され、先の見えない閉鎖的な状況とともに巻きこまれた人びとが、ありあわせの知識を寄せ集めて作りあげたものだというのです。それゆえに、落ち着いた状況であれば、けっして信じられないような物語が、集散的に発明され、増殖し、多くの人びとに受容されているという分析は、なかなか鋭いと思います。

この分析は、1940年代の強制収容所の現実だけにあてはまるものではありません。新聞の伝える情報がほとんど参照されず、SNSの閉ざされた空間にただよう解釈に動かされやすくなっている現代においても、たいへん示唆的です。

長期的な展望に立った枠組みをデザインするには、人間中心主義の思考を一度のりこえる必要があるように思います。

たとえば、科学社会学者ブルーノ・ラトゥールの「モノの議会 (Parliament of Things)」という提案は、人間だけではなく、動物、植物、環境、テクノロジーといった「非人間 (モノ)」もまた、主体として対等に扱う討議の場を構想しています。ラトゥールは、ブラジル北部のアマゾンの森でおこなわれた、森とサバンナの境界における土壌の浸食に関する調査研究を観察しました。多様な専門からなる科学者たちが、土の実態を図や記号といった知識に変換したことは、すなわち「モノの議会」において作物や森林を育ててきた土地に発言権を与えることでした。科学者たちは物言わぬ自然の「スポークスマン」となって、自然と社会、科学と政治の分断を解消しなければならぬと論じています。

つまり、議会をはじめとする対話の社会的制度を「人間中心主義 (human-centered)」から「人間中心主義を超えたもの (more than human-centered)」にすること、すなわち、人間と人間ならざる動植物や自然との「協議体 (constituency)」を構想していくのです。

人間ならざる存在とともに、われわれ人間が社会的な課題を解決していくことなど、すこし前であれば、いかにもSF的な空想でしかないと思われたでしょう。しかしこれは今や現実起こっています。

私は以前、本学東京カレッジの浅間一特任

教授とともに、アリなどの社会性生物の群れにおける協調行動に学びながら、自律分散型ロボットシステムをつくる研究に取り組んだことがあります。個々の目的達成を相互にさまたげないという原理と、1台ではできないことを助けあって達成するという原理から、ロボットたちの協調を可能にしたのです。

こうしたシステムのさらなる発展形は、人間共存型のロボットシステム、ということになるでしょう。人間のように手でさわって、さまざまなものをつかむ経験をたくわえて、それを未知のものに応用し可能性を拡げていくような知識の使い方は、今まさにPhysical AIとして実現されようとしている技術です。人間の身体や認知の機能をそのままロボットが代行するのではなく、ロボットと人間がそれぞれの役割を分担する。これからの世界では、こうしたmore than human-centeredのあり方を考えていくことが重要です。

さて、立派な祖先になれるか、先駆者になれるかという問いにおいて、みなさんがどんな人間になりたいのか、そして、どんな社会で生きてゆきたいのかが問われているという主題に戻りたいと思います。

自分の夢や目標を達成すること、つまり、こうなりたいと目指している自分になることを、心理学では「自己実現」という概念で表現します。その自己実現は、自分中心的な「自己満足」とはまったく異なっています。

心理学者マズローは、生理的な欲求、安心・安全の欲求、人間関係を求める欲求と、他者からの承認欲求のうえに、それらを統合するものとして、「理想の自分であろうとする願望」を位置づけます。

その意味で自己実現は、社会という共存の可能性をつくりあげ、拡張してきた人間固有の未来への駆動力なのです。このような自己実現への志は、個人だけでなく、社会を構成する組織にも求められる姿勢です。大学もまた、その一員として、よりよい社会をめざす姿勢が問われています。

望ましい未来をつくりあげるのは、みなさん一人ひとりのこれからの行為ですが、みなさんは決して一人ではありません。過去に学び、未知にたじろがず、わからなさや正面から向かいあう、その挑戦を、この大学の大学院で身につけた知恵と、友として出会う他者との対話が支えてくれるでしょう。東京大学のアラムナイとしてともに歩んでいただくことを願っています。

あらためて、修了おめでとうございます。

## 答辞 (第一部)



農学生命科学研究科  
田中翔大さん

本日は、藤井総長をはじめ、諸先生方並びにご来賓の皆様のご臨席を賜り、盛大な式典を挙げていただきましたことを、修了生を代表いたしまして心より御

礼申し上げます。

本学において研鑽を積み、この節目の日を迎えることができましたことを、大きな喜びとともに受け止めております。

東京大学の強みの一つは専門分野の多様性にあると考えます。私は、その中で、実学としての農学、とりわけ海や川に生息する水圏生物を扱う分野において、水産資源の持続的利用の基礎となる研究に取り組みで参りました。水産資源が変動する仕組みを明らかにするため、重要水産資源であるイワシ類を対象に、野外採集や飼育実験を繰り返し、シラスと呼ばれる初期発育段階の成長や食性などの特性を丁寧に分析してきました。地道な作業と試行錯誤の先に見えてきたのは、水産資源学の古典的仮説と現在の理解を統合する、魚類の成長と生き残りに関する

新しい仮説でした。研究対象に粘り強く向き合うことで、独創的発想力を培うことができたと思っております。

独創的な視点を持つことは、未知の現象に気づくためにも重要だと考えます。ある国際会議では、「私たちは、世の中の物事の大部分について、自分たちが何を知らないのかさえない」という言葉に触れました。これは、未知がいかに広大であるかと同時に、その未知を認識すること、すなわちメタ認知の重要性を示唆してくれました。専門性を深める中で培われた独創的視点は、社会でも未知に光を当てる力になると確信しています。

私たちが修了生は、それぞれの学業や研究を通して多彩な経験を積みとともに、独創的視点と問題解決力を涵養して参りました。本学で得たものは、学問分野の

発展にとどまらず、社会に潜む課題に向き合う際にも役立つはずで。世界には食料問題や環境問題、紛争など様々な課題がある一方、いまだ顕在化していない課題も数多く存在するでしょう。私たちは、本学で学んだ独創的視点と問題解決力をもって、社会に潜む課題を見だし、その解決を切り拓き、世界の持続的発展に寄与できるよう、一層精進して参ります。

最後になりますが、これまで温かいご指導とご鞭撻を賜りました諸先生方、友人や先輩・後輩の皆様、そして、常に私たちを支えてくださったご家族の皆様、心より厚く御礼申し上げます。皆様の益々のご健勝と東京大学の一層の発展を祈念いたしまして、修了生代表の答辞とさせていただきます。

## 答辞 (第二部)



教育学研究科  
堀川優弥さん

本日は総長をはじめ諸先生方のご臨席を賜り、学位記授与式を挙げていただきましたこと、修了生を代表し心より御礼申し上げます。

大学院での日々は、自らの興味関心と向き合い、その探求を社会へいかに接続するか問い続ける時間でした。自身の関心を適切な問いへ落とし込み、他者に伝わる形で表現する壁に幾度も直面しました。自己完結する探求のみでは社会への価値還元は難しく、純粋な関心を軽視しては研究を持続させることは困難です。理論と実践の往還の中で葛藤を乗り越え、知的好奇心を社会的意義へ結実させるプロセスこそ本学で得た尊い学びです。

この学びは、人工知能の発展により人間の役割の代替が進む中、一層の重みを持つと感じています。技術が進化しても、「何を知りたいか」という根源的な興味こそが、知を切り拓く原動力であり続けるはずで。私たちの興味が向かう対象

は、学問領域の枠で区切られているわけではありません。各分野の深い探求が重要である一方で、時に垣根を越え、複数の視点を掛け合わせることで複雑な世界を多面的に捉えられるように思います。しかし同時に、そのような世界において普遍的な正解を見出すことは困難であると感じられます。だからこそ既存の常識と真摯に向き合い、事象の本質を絶えず問い直しかつ続けることに、人間が研究活動を行う真の意義があると考えます。

そのような問いに向き合う日々の研究活動は、孤独な営みに思えますが決して一人で完結するものではありません。複雑な事象を紐解く上で、自己の思考のみに依拠したアプローチには限界があります。自大学の教員や先輩方との「縦のつ

ながり」、他大学の同世代との「横のつながり」、そして、他大学の教員との「斜めのつながり」を通じた対話が限界を打ち破る力となりました。異なる背景を持つ人々との知の交わりが自身の前提認識を相対化し、多面的な洞察をもたらしたのです。純粋な探求心と、多様な知の交わりを経て獲得したこの視座を胸に、私たちはこれからも事象の本質を問い続け、それぞれの立場で探求の成果を社会へと還元していく所存です。

最後に、今日まで私たちの歩みを支えてくださった全ての方々に、修了生一同、深く感謝申し上げます。皆様の健勝と東京大学の益々の発展を祈念し、答辞いたします。本日は誠にありがとうございます。

## 答辞 (第三部)



情報理工学系研究科  
三木章寛さん

本日は盛大な式典を催していただき、修了生を代表して心より感謝申し上げます。

東京大学という恵まれた環境で過ごせたことに深く感謝しています。先生方

のご指導や周囲の学生から刺激を受けながら研究に向き合った時間は、かけがえないものでした。行き詰まれば近郊の定食屋や珈琲店で一息つき、気づけばまた研究の話始める、そんな日々でした。

さて、こう尋ねられることがあります。「博士課程で得た最も重要なものは何ですか」と。私は、「好き」を探し追求できたこと、と答えています。

私はロボットを通して人間を語るという研究に取り組み、新たな構成論を模索してきました。それは、流行を追いかけ、既存の評価指標を競う道ではなく、先行研究や発表の場を見出すことも困難な、暗闇を手探りで進む時間でした。しかし、悩みながらもどこか惹かれ、挑戦し続けてきました。

きっと、偶然でも必然でも片付かない、

理由のつかない「好き」があったからだと思います。

この大学には、挑戦を受け止めてくれる学際的な環境がありました。たとえば、私の所属する知能機械情報学専攻は、ロボット、AI、VR、細胞、脳にいたるまで、人間・機械・情報を網羅的に扱えるこの上ない環境でした。同時に、大学は、自分の信じる何かを探し挑戦する時間を守ってくれる場所でもあり、腰を据えて「好き」に向き合うことができました。これは大学だからこそ得られた経験です。

情報化社会が進み、研究だけでなく日常に至るまで、誰もが比較や批判の中に置かれる時代になりました。他者との差に悩み、自分を失いかねない時代です。

しかし、そのような時代にこそ、手探りに、そしてがむしゃらに「好き」を探

し求めた経験は、価値をもつのではないのでしょうか。比較社会で誰かの何か光って見えることもあるでしょう。ですが、私たちは、大学での経験を経て、各々が「好き」だと信じる何かを探し求め形にしていけることができます。そしてそれを貫き挑戦し続けることが、より良い社会につながると私は信じています。

最後に、自らの拠って立つものを見つめ、挑戦し続ける私たちを受け止めてくださったこの大学と、その歩みを支えてくださった先生方、仲間、そして家族に、心より感謝申し上げます。この感謝は言葉だけで終わるものではありません。私たち修了生のこれからの挑戦をもって応えていくことを誓い、答辞とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。



# 令和7年度卒業式

令和7年度卒業式が、3月25日(水)に、安田講堂において行われました。今年度の卒業式も第一部・第二部・第三部の3回に分けて挙行され、音楽部管弦楽団によるモーツァルト作曲「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」長調 K.525の演奏が流れる中、総長をはじめ、理事、学部長並びに来賓の國部毅東京大学校友会会長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となりました。藤井輝夫総長から各学部の卒業生代表

に学位記が授与され、卒業生に向けて告辞が述べられた後、来賓の國部東京大学校友会会長から祝辞をいただきました。その後、卒業生総代(第一部：経済学部 橋本研人さん、第二部：教養学部 留野偉多さん、第三部：医学部 折井森音さんから答辞が述べられ、式を終えました。式典の様子はインターネットを通じてライブ配信され、卒業生とご家族を含む、多くの方にご覧いただきました。



## 総長告辞

みなさん、卒業おめでとうございます。

本日、この安田講堂で卒業式を迎えられたみなさんに、本学の教職員を代表して、心よりお慶び申し上げます。また、みなさんの大学での学びを支えてくれたご家族や関係者の方々に、感謝とともに祝意をお伝えいたします。

みなさんが、これから進む道はそれぞれに異なり、活躍していく場もさまざまだろうと思います。しかし、どこで生きていくことになっても、東京大学とともに学んだ仲間たちと競い、また助けあいつつ研究を進めた経験は、ときに直面するかもしれない試練や困難の克服にきっと役立つにちがいない、と私は信じています。

今日は、みなさんの未来を構想する指針となるかもしれない、一つの問いについて考えてみようと思います。その問いは、私たちは次の世代のために「どのような社会を築いていくべきなのか」です。それはまた、「どんな人生が望ましいのか」という、みなさん自身の理想や目標を問うことでもあります。

この問いに正面から答えるには、どんなことが必要なのでしょう。

世界では今、かつてない深刻さにおいて、対立が激化し、分断が深まっています。

さまざまな国で、自分たちだけの利得を重視する自国第一の主張が強まり、戦後の国際

連合のもとにつくられた国際秩序維持の枠組みだけでは十分に対応できない、不確実な時代に私たちは入りこみつつあります。

こうした対立や分断の極限形態が「戦争」でしょう。現代の戦争は、ウクライナや中東などで今も続いている、銃や無人機をつかった武力衝突だけではなく、サイバー攻撃や、偽の情報、食料やエネルギーの不足など、さまざまな形で人びとの日常生活がおびやかされ、その影響は経済の混乱や難民問題などをつうじて、世界全体を巻きこんでいます。

平和で自由で公正な秩序を、どう創りあげることができるのか。

21世紀の国際関係は、主権国家を単位とする制度として完結するものではなく、多様な組織・集団が複雑にからみあう多層的・複合的なシステムです。「敵か味方か」の単純な二分法で割り切ってしまうと、可能だったかもしれない対話が難しくなり、理解を拒んだままの分断が深まるでしょう。

そうしたなかで、私たちはどのように、新たな社会のあり方を構想し、共に生きる道を切り拓くことができるのでしょうか。

私は、現代の錯綜する課題に向きあうためには、一つの見方にとらわれず、ものごとを多角的にとらえ、新たな可能性をつくりあげることが大切だと考えています。ビジネスの現場では、「鳥の目」「虫の目」「魚(さかな)の目」といわれるような、複数の視点をもつことが重要だといわれています。

「鳥の目」は、視点を引き上げ、「世界を俯瞰すること」を可能にしてくれます。私たちは、とすれば、自分の立場や所属、価値観の内側だけから世界を解釈し、理解しようとしてしまいます。しかし、次元の違うところから見わたすと、別の可能性が見えてきます。

飛行機が実用化されつつあった時代に、フランスの作家サン＝テグジュペリは、『人間の大地』という著作の中で、戦争について「なぜ憎みあうのか? 同じ惑星によって運ばれ、同じ船の乗組員としての責任を分かちもつわれわれは、運命をともにしている」と語りました。飛行士でもあった彼は、空から大地を見わたし、人間が地上で引いた国境線が、自然の風景の中には存在しないことにあらためて気づき、対立している相手もまた、同じ地球に生きる存在であることを感じたのでしょう。

視点を引き上げて俯瞰すれば、AかBかという二者択一ではなく、その間にあるグラデーションや、中間的で折り合せそうな選択肢が見えてきます。さらに、「Aであると同時にBでもある」という矛盾を抱えたままの共存、すなわち本学出身の哲学者・西田幾多郎が「絶対矛盾的自己同一」とよんだ見方も可能になります。違いや矛盾を排除せず共に生きる道を探ろうとするなら、異なる次元から考える「鳥の目」が、不可欠になるでしょう。

2月に、本学の卒業生でもある加藤登紀子さんが、ジョン・レノンの「イマジン」に敬意を捧げるチャリティコンサートを、この安田講堂

で開催しました。あの歌も、半世紀前のサン＝テグジュペリと同じ主題を歌詞にしています。

ジョン・レノンの歌のほうは、飛行機に乗らなくても、想像力すなわちイマジネーションの翼さえあれば、「鳥の目」で見ることができるのだということを、あらためて教えてくれています。

もちろん「鳥の目」だけでは充分ではありません。対立のただなかに生きる人びとの気持ちや事情に向きあひながら、それらをより大きな関係の中に位置づけ直すためには、「虫の目」をもって寄りそうことも必要になってくるでしょう。

ここでいう「虫の目」とは、具体的な現場において、対象に実際に近づき、細かく詳しく観察し、自分の体で実感することです。「虫」とは、地にしっかりと足をつけて、自分で歩むことの比喩です。

「鳥の目」による文字通りの鳥瞰によれば、ものごとの概要を抽象化して理解することができますが、実際の現場に身を置き、他者の現実に触れる経験も大切です。つまり「虫の目」の体験があればこそ、違いそのものに向きあひながら理解を深めていく対話が可能になります。

ドイツの哲学者ヘーゲルは、対話をつうじて新しい見方を生み出す方法として、弁証法を体系化しました。一つの主張、すなわち「テーゼ」に対して、異なる主張である「アンチテーゼ」が現れたとき、どちらかを否定して終わるのではなく、ねばりづよく対話を続けることで双方を包みこみながら、「ジンテーゼ」という第三の新たな視点へと発展させます。

その第一歩は、「良い聞き手」になることです。相手の言葉を尊重し、その背後にある経験や価値観を、同じ「虫の目」で想像しながら耳を傾ける姿勢が欠かせません。

「良い話し手」になることも対話継続の不可欠の条件でしょう。「良い話し手」には、相手を言い負かす力ではなく、自分の思いや考えを論理的かつ誠実に伝える力が必要です。

そして、対話は一度きりの交流で完結するものではありません。

違いを確認しながら理解を重ねていく、往復のプロセスとして続いていきます。こうした対話を重ねる中でこそ、俯瞰的な思考が育まれていきます。弁証法的な対話は、対立を乗り越え、分断を修復するための実践的な「知の技法」なのです。

さらに視野を広げると、この考え方は私たちの等身大の自然でもある、体の仕組みにも通じるものがあります。昨年のノーベル賞受賞で注目された免疫系のT細胞には、外敵に

立ち向かう働きをもつものと、その反応が過剰にならないように抑えるものがあります。それらのバランスによって、健康とよぶべき平和が保たれているわけです。

さて、三つ目の「魚（さかな）の目」とは、どんな視点なのでしょう。

魚が海の中の潮の流れを読むように、過去、現在、未来と流れていく時間軸を入れた視点のことを指すことが多いようです。最初に述べた「次の世代のためにどのような社会を築いていくべきなのか」を考えるためには、時間軸を考慮した視点が必要です。

その見つめる先には、地球温暖化やパンデミックの脅威への対策など、地球規模課題への取り組みがあります。

私は、みなさんにこうした複数の目をもって、自分たちを支えている環境を自覚的にとらえ、いま深刻化しつつある対立を乗り越え、分断を修復する想像力をもっていただきたいと考えています。

近年、社会の各方面において、ダイバーシティ&インクルージョン（D&I）が重視されています。しかし、多様性を認めて包摂するという理念が、実際にはマイノリティにマジョリティへの同化を強いる結果にとどまっていることもあります。たとえば、男女平等の雇用制度を一律に適用しても、すでに社会的に確立してしまった出産や育児に伴う負担が均等でなければ、結局のところ女性が不利になります。これなどは、海の中の潮の流れそれ自体を、変えなければならぬ一例でもあります。

そこで重要になるのが「エクイティ（公平性）」の論点です。エクイティとは、形式的な平等ではなく、一人ひとりの条件の違いを認め、その差を埋めて、それぞれが自分の力を発揮できるように支援することです。たとえば、同じ高さの踏み台を全員に配るのではなく、背の低い人には高い踏み台を、背の高い人には踏み台は不要だと判断し、誰もが自由に参加できる状態をつくる。現在はD&Iにエクイティの「E」を加えたDEIが重視されています。

DEIの考え方は、障害をめぐる課題にも通じます。本学先端科学技術研究センターのフェローで、日本科学未来館館長の浅川智恵子さんは、視覚障害者向けの音声ブラウザやAIスーツケースを開発し、視覚障害者の情報アクセスや移動への支援に取り組んでいます。

今から約60年前の1963年、本学の茅誠司総長は、卒業式で「小さな親切」の重要性について触れ、「勇気を持ってやっていただきたい」と、卒業生に述べました。大学での学

びとは、知識をただ増やして蓄えることではなく、他者と共有して、行動として表すことではじめて生きるという思いが、この言葉には込められています。浅川さんもまた「必要なのは大きな変革ではなく、少しの工夫だ」と語っています。

分断の時代を生きるみなさんには、この精神をさらに進めて、「小さな対話」を、勇気を持って積み重ねてほしいと思います。

東京大学では、2027年の創立150周年に向けて、「響く」と「存在する」という二つの言葉を合わせた「響存」をテーマに掲げています。多様な存在がただ並ぶのではなく、互いに影響しあひながら共に生きる、そのような組織や社会が望ましいと考えているからです。

小さな対話から生まれる共感や実感もまた、互いに響きあひ、やがて共有され、社会の中で意味を持ちはじめます。それらは、制度やルール、経済の仕組みを見なおし、つくり変えていくための重要な手がかりとなります。

人びとが共に助けあうことを基盤とする「共助資本主義の実現に向けた大学連合（SOLVE!）」も、その具体的な取り組みの一つかもしれません。そこでは、企業、社会活動、公共に携わる人びとが、小さな対話を重ねながら、社会課題を解決することそのものが経済的な成長にもつながっていくような新しい仕組みを模索しています。

共助資本主義のような取り組みにおいては、信頼がなによりも大切になります。しかし、本学に対する信頼は、まことに残念ながら、昨年来報道されている不祥事によって大きく損なわれてしまいました。私は総長として、未然に防げなかった事態を重く受け止め、みなさんにご心配をおかけしたことをあらためてお詫びいたします。同様の事案が再び起こることのないよう、大学としてのガバナンスの仕組みを、ここでお話したような複数の視点を活かして作りあげていきます。

未来に残すべき社会は、理念や哲学だけで築かれるものではありません。だからこそ、想像力の翼をはばかせて、社会の望ましいあり方や価値について語ることを、あきらめではなりません。小さな声であっても、その対話がつながり、互いに響きあうことで、社会を少しずつ変えていきます。それこそが、対立と分断の時代における「創造的地球市民」としての生き方です。みなさんにはぜひ、その担い手として、しっかりと地に足をつけ、自らの歩みを進めていってほしい、そう願っています。

ご卒業、まことにおめでとございます。

## 答辞 (第一部)



経済学部  
橋本研人さん

今日は、私達卒業生の為にこのような素晴らしい式典を挙げて頂き、誠にありがとうございます。ご多用の中ご臨席賜りました皆様、様々な場所からお心をお寄せ下さる多くの方々に、卒業生一同

心より御礼申し上げます。また、経済学部並びに卒業生の代表として、このような機会を頂いた事は、身に余る光栄でございます。

私の大学生生活は、学びを通じて自分の進む道を見出していく時間でした。福井県の公立高校で東京大学に合格する事ばかりに気を取られていた私は、推薦入試を経て入学したものの、大学で専門的に学びたい事が定まっていませんでした。そのため前期課程では、文理の垣根を越え、様々な授業を履修・聴講しました。そのような中、友人に誘われてゲーム理論の授業を受けた事が、大きな転機となりました。ゲーム理論の、数理モデルを用いて、人々の意思決定や相互依存の状況を分析するという姿勢に強い関心を持ち、私は経済学部への進学を決意しました。

経済学部では、複数のゼミに所属し、研究で世界をリードする素晴らしい先生方に会える事ができました。その中で、あるゼミで取り組んでいたオークション理論の研究において、経済学における重要な未解決問題の一部を解く事ができた経験は、私にとってかけがえのないものです。学部4年次には、その研究成果を紹介するべく、東京大学を訪問する世界各国の経済学者の方々と度々議論しました。更に、指導教員の一人である神取道宏先生がその研究成果をアブダビでの国際学会で紹介して下さる事となり、私自身もその学会に参加しました。それらは、東京大学での学びが世界へとつながっている事を実感した出来事でした。

さて、近代経済学の祖であるマーシャルは次のような言葉を残しています。「冷静な頭脳と温かい心を持って、社会

で困っている人々の為に全力を尽くすような人を多く世に送り出したい」。この冷静な頭脳と温かい心という姿勢は、経済学部の先生方が日々我々にお示し下さったものですが、経済学者に限らず、社会の問題に立ち向かうあらゆる人々にとって、模範とすべき姿勢だと思います。私達卒業生も、各々の進路において、冷静な頭脳と温かい心を持ち、ここで得た学びを地球社会に還元できるよう努力して参ります。

最後になりましたが、今日まで導いて下さった先生方、日々支えて頂いた職員の方々、共に学び励まし合った先輩・同期・後輩の皆様、そして何より、どんな小さな悩みにも耳を傾け、常に支えてくれた家族に、心より感謝申し上げます。皆様方のご健康と東京大学の益々の発展を祈念して、答辞といたします。

## 答辞 (第二部)



教養学部  
留野倅多さん

今日は、教職員の皆様、御来賓の方々のご臨席、また、藤井総長と國部校友会会長からのお言葉を賜りましたこと、卒業生を代表いたしました厚く御礼申し上げます。卒業という節目に当たり大学生活を振

り返してみると、私はこの4年間、自然科学に関わり続けていたと思います。

前期課程では、科学の面白さを広める活動を行いました。科学コミュニケーションのサークルである東大CASTでは、小学校や博物館などで実験や工作を行い、駒場祭では、AI時代を予見したチューリングテストを作り上げました。多様な来場者の方々と対話は、刺激的で、忘れがたいものです。仲間たちの展示も大変好評だったのもあり、駒場グランプリを受賞しました。

後期課程では、自分の好きな数学と物理を学べる環境を求め、教養学部統合自然科学科を選びました。幅広く学際的に学ぶうちに、理論物理、特に金属や高分子といった物質の性質を調べる物性理論に惹かれました。私の卒業研究は、強い量子効果が働く多体系についてです。

中性イオン性転移を持つ有機電荷移動型錯体のモデルとして導入され、トポロジカルな観点から非自明な性質を調べました。このモデルを原理的に解くには、仮に原子が1000個だとしても、4の1000乗、すなわち603桁のサイズの行列を扱う必要があります。これは到底不可能です。そこで使用したのが、30年前に開発された密度行列繰り込み群という計算手法です。一次元系であることの特性をフルに活かしたこの手法は、自分には全くない発想で、学問がいに秀逸なアイデアの積み重ねによって作られているのかを強く実感しました。このように学問に向き合っていく中で、専門知という巨人の肩の上に立つことができたのは素晴らしい経験だったと思います。

しかし、専門知は新たな局面を迎えています。私たちが一年生のときに誕生した

ChatGPTを皮切りに、もはやAIは知的活動のアシスタントのみならず、知の創出にも深く関わり始めています。専門知そのものの構造や存在意義・信頼性を変えるでしょう。巨人はAIになりつつあります。

また、広く世界にも目を向けると、ルールに基づく国際秩序が終焉をむかえ、断絶の時代となりつつあります。東京大学を今日卒業し、それぞれの道へと羽ばたく私たちは、激変する時代に立ち向かわねばなりません。

最後になりましたが、本日に至るまでご指導、ご支援くださった先生方、職員の皆様、共に切磋琢磨しながら学び合った友人たち、そして私達を温かく見守り続けてくれた家族に、心より感謝申し上げます。皆様方のご健康と東京大学の益々の発展を祈念し、答辞といたします。

## 答辞 (第三部)



医学部  
折井森音さん

東京大学での6年間を通して私が感じたことは、私たちが当たり前のように続くと思っている日常が、いかに貴重なのであるかということです。

私はコロナ禍のため、日本武道館での入学式を経験できませんでした。大学構内への立ち入りが制限され、前期教養課程の間は「キャンパスライフ」とは程遠いオンライン中心の大学生活を過ごしました。ロシア語TLPを修了し、コロナ禍が落ち着いたならロシアに行くのが楽しみにしていましたが、ロシア・ウクライナ戦争が勃発し、断念せざるを得ませんでした。さらに現在はイスラエルとガザの武力衝突やイラン攻撃なども重なり、国際情勢は益々不安定化しています。病院実習では、病気によって今まで当たり前でできていたことができなくなった患者さんたちと出会い、彼ら彼女らの無念さを目の当たりにしました。

私たちの日常やその延長線上にある未来は、決して自明のものではありません。

それらは多くの人々の努力と偶然の積み重ねによって支えられています。私たちがそのありがたみを頭では理解しているはずですが、つい忘れてしまいます。そして、失って初めてその大切さを思い出すのです。

「当たり前」は、時として崩れ去ります。ここで思い出すのは、政治学者の宇野重規先生のお言葉です。「自分が信じていた何かが音を立てて崩れる瞬間がある。そういうときに『みんな嘘だった』と投げやりにならず、どう立て直していくかを冷静に考えるのも知性の底力だろう」

「知性の底力」は、どうすれば養えるのでしょうか。私達は、東京大学で知性の土台として、専門領域に留まらない幅広い知識、客観的に物事を分析する力、難題であっても投げ出さないタフさを身

に付けてきました。しかし、私たちの意識や思惑はややもすると目の前の限られた対象に向かいがちです。「知性の底力」を培う第一歩とは、「当たり前の日常」が失われた過去や現在の事例に積極的に目を向け、その回復に向けてどのような努力がなされてきたのかを知ることでないでしょうか。

最後になりましたが、私たちの大学生活を支えてくださった先生方と職員の皆様、ともに学び合った仲間たち、そして家族に心より感謝申し上げます。今日ここを旅立つ私たちは、世界の「当たり前の日常」が揺らぐ瞬間においても、そこから目を背けず学び続ける知性と他者への想像力を忘れずにいたい。東京大学での学びが、そのための礎であり続けてくれることを信じています。





令和8年度の学部入学式と大学院入学式が、4月13日（月）に日本武道館において挙行されました。

午前の学部入学式には約3,000名の新入生、そのご家族など約4,900名、合わせて約7,900名が出席しました。総長、理事、学部長、研究科長、研究所長並びに来賓が登壇し、開式となりました。式では、大学を代表して藤井輝夫 総長から式辞が述べられ、続いて寺田寅彦 教養学部長が式辞を述べました。式辞の後、来賓の劇作家・演出家・役者 野田秀樹様および東京大学校友会 國部毅 会長からそれぞれ祝辞をいただきました。その後、入学生総代 仮野眺<sup>ひかる</sup>さん（教養学部門文一類）による宣誓が行われました。

午後の大学院入学式には、約3,100名の新入生、そのご家族など約3,000名、合わせて約6,100名が出席しました。総長、理事、研究科長、研究所長並びに来賓が登壇し、開式となりました。式では、大学を代表して藤井輝夫 総長から式辞が述べられ、続いて伊藤耕一 新領域創成科学研究科長が式辞を述べました。式辞の後、来賓の国際連合事務次長・軍縮担当上級代表 中満泉 様および東京大学校友会 國部毅 会長から祝辞をいただきました。その後、入学生総代 杉本智美さん（総合文化研究科）による宣誓が行われました。

式典の様子はインターネットを通じてライブ配信され、新入生のご家族を含む、多くの方にご覧いただきました。

## 令和8年度学部入学式総長式辞

みなさん、本日は東京大学へのご入学、まことにおめでとうございます。

みなさんはこれまで、中学校・高校などで多くの教科書を読み、さまざまな「知識」を吸収してきたと思います。それらのどの一行も、過去の多くの先人たちが探究して発見し、あるいは仮説を立て、ときに実験や試行錯誤をへて検証し、知識として共有されたものです。知識を体系的に使いこなして、適切な解決を生み出す「知」としての科学は、人類が世代をこえて積みあげてきた知恵の結晶です。東京大学は、まさにそうした「知」の創造を使命としてきました。

だからこそ、みなさんには、ここ東京大学において、蓄積された知識を学ぶだけでなく、自らの力で「新しい知を生み出す」存在へと成長していただきたいと思ひます。知識を情報として受け取る学びから、世界がまだ知らない、あるいは探られていない知を創り出す喜びへと、その一歩を踏み出してもらいたいと思ひています。

「新しい知」が生成するメカニズムについて、今日は「原点」と「座標軸」の組み合わせという観点から読み解いてみましょう。

「知」は、書物や教科書に書かれた、あるいはネットで調べることができる、単なる情報ではありません。もっと総合的で主体的なものであり、あるいは「知恵」といってもよい、実用的で活き活きとした動きを有するものです。

私たちが日々何気なく口にしている調味料もまた、何世代かの試行錯誤と創意工夫の末に生まれた、生活の知恵の結晶です。たとえば、日本の食文化を代表する「醤油」も、その歴史をふりかえると、そこに新しい知の誕生ともいふべき、イノベーションの連鎖を見出すことができます。

江戸が都市として発展してきた初期は、長距離を遠くから運ばれてくる上方産の下り醤油しかありませんでした。味も品質も優れていましたが、味噌や塩に比べてたいへんに高価であったため、庶民にまで広くは普及しませんでした。しかし江戸時代中期になると、関東の野田や銚子の地で濃口醤油の本格的な製造が始まり、やがて利根川や江戸川の水運を活用して、この新しい醤油が大量に江戸という都市にもたらされるようになります。

醤油の香りと成分が、魚の生臭さを抑え旨味を引き立てることで刺身が発達し、握り寿司のようなファストフードが生まれます。山椒味噌焼きで食べていた鰻に、照り焼きという醤油ベースで甘く仕上げる技法が発明されることで「蒲焼き」が話題の商品となり、また天つゆで食べる天ぷらが定着していきます。

町にはファストフードの屋台や、新しい料理店が並んで外食文化が発展し、いわゆる「和食」を代表するような料理が確立していきます。そのきっかけとなったのが、醤油の普及でした。醤油の製造地という「原点」が日本の西から東へと移動することで、新たなイノベーションが創りだされたのです。

モノの流通に関わるネットワークが新たな「原点」をはぐくみ、イノベーションを生み出した例も、歴史は教えてくれます。和食の旨味を支えていた昆布もまた、交易のネットワークがインフラとなって、新たな文化が成熟していった好例でしょう。

大阪と北海道を日本海経由で結んだ「北前船」は、上質な昆布を西日本各地にもたらし、それがたとえば大阪で塩昆布に加工されて名物となり、沖縄に及んでクーブイリチー（昆布の炒め煮）という郷土料理になりました。逆に北海道にもどっていく北前船が、関西の都市で不用になった木綿の古着や端切れを東北の寒冷地へと運び、その土地で「裂織」な



総長

### 藤井輝夫

どの伝統工芸を生み出す「原点」となったことも、同じ現象の裏表だと考えることができます。

このように、私たちの日常文化のなかにも、新たなインフラやネットワークが可能にした「原点」の形成や移動として、その発展、成熟、洗練を理解できるものが多くあります。新しい道具やデバイスの誕生が、文化と産業の「座標軸」を連鎖的に生み出す現象は、現代でも見られます。

私たちの生活を支えるスマートフォン関連技術は、その典型でしょう。2007年1月、Steve Jobsが初代iPhoneを発表して以降、スマートフォンという新たな土台の上に、世界中の開発者がじつに多彩なアプリケーションを数限りなく生みだしました。そして道案内や支払いなど、日常生活のあらゆる場面で私たちを支えています。

スマートフォンは、写真を撮り、言葉を添え、瞬時に見知らぬ人びとと共有するという、開発当初は想定していなかった行為を私たちの日常の一部にしました。そうした視覚の共有と考察・批評の組み合わせは、現代における多くの流行や文化の新たな「原点」となり、



それまでにない作品制作の「座標軸」となりました。視覚のみならず、音声をふくむ動画の共有もまた、新たな「原点」となっています。そこにおいて、多くの才能あるアーティストが見出され、その活動が広く世界に知れわたる「座標軸」となっています。

この構造は、江戸時代に出版技術の向上と日常への普及が、世の中を自由気ままに諷刺し、笑いあう「川柳」文化の発展を支えた歴史と、じつはよく似ています。

通信や交通、情報共有の手段であるインフラの進化が「原点」となって、新しい食べ物や着物や文化が創造される。そこで、新しいベクトルをもつ「座標軸」が形成されて、新たな料理や作品が生まれる。それが、さらに次の「原点」となっていく。このような「知」を生む連鎖は、歴史のあらゆる場所に見出すことができます。逆にいえば、この「座標軸」の組みなおしこそが、新たな「原点」の発見であり、そこに新しい「知」を創造するためのヒントが隠されているのではないのでしょうか。

驚くべきことに、この「原点」の認識と「座標軸」の組みなおしを、私たちの「脳」は日常におこなっています。それは「主観」と「客観」の切り替えというふうにも、とらえることができる、柔軟で可能性に満ちた脳の機能です。

たとえば、空間認識をつかさどる海馬には「場所細胞」とよばれる神経細胞があり、A地点からB、Cへと歩くと、それぞれの場所に対応する細胞が順番に活動します。私たちの脳の中には、すでに空間の地図が描きこまれていて、場所細胞の活動とあわせて自分が空間内のどこにいるのかを認識しています。このしくみを解明した University College London の John O'Keefe らには、2014年のノーベル生理学・医学賞が与えられました。

明らかにされた脳のしくみは、二つの異なる座標系を用いて世界を把握しているというものです。一つは「自分から見て対象がどこにあるのか」といった、自分を原点とした主観的なエゴセントリック座標です。もう一つは、空間全体の中で「自分がどこにいるのか」を示す、GPSのような客観的なアロセントリック座標です。

脳は、これらの二つの座標系を柔軟に切り替え、あるいは重ねあわせながら用いることで、豊かでしなやかな空間認識を可能にして

います。いいかえれば、私たちは日々の生活の中で、知らず知らずのうちに「原点」を定めなおし、「座標軸」を組み替えながら、世界を理解しつづけているのです。

物理や工学の世界でも、よく似た考え方が用いられています。

流体や物体の運動を記述するとき、空間における一点一点の様子を見る「オイラー座標」と、流れに乗って動く一粒一粒の物質を追いかける「ラグランジュ座標」という二つの見方があります。前者は、いわば空間に固定したカメラで対象の動きを外側から眺める客観的な視点、後者は対象にとりつけたカメラで動きを内側から追う主観的な視点にたとえることができるでしょう。

ロボットのことを考えてみてもよいかもしれません。ロボットが目の前の障害物を回避するだけであれば、必ずしも作業空間全体の地図を必要としません。しかし、「この荷物をあの建物の3階まで運びなさい」といった仕事を任せようとすれば、地図や目的地といった知識の体系が不可欠になります。生物も同じで、単純な行動だけであれば局所的で主観的な情報でも足りませんが、高度な行動や社会生活を営むようになると、「世界の中で自分がどこにいるのか」という、より大きな座標系を持つ必要が生じます。

数学における「0」という記号も、この座標系の発想と深く結びついています。「0」の発見とは「何もないこと」を表す記号を、位取りや演算規則の原点に位置づけることでした。原点と座標軸を定めることで、私たちは物理世界のあらゆる点を数値で表し、その位置を比較し、その動きを議論できるようになったのです。

主観と客観という相互に補完しあう座標系は、空間認識だけでなく、過去や未来といった時間認識や、社会や人間どうしの関係認識の中にも同様の構造を見出すことができます。

みなさんも、すでにさまざまな「原点」と「座標軸」を背負って、ここに集まっているでしょう。高校では、これまで比較的わかりやすい評価軸で、学んできたかもしれません。しかし、大学生活では自分の中にある「原点」と「座標軸」を意識的に選びなおし、ときに組み替えて、学び方をデザインしなおすことが大切になります。

東京大学では、大学一・二年生の前期課程で幅広い教養を学び、三・四年生の後期課程で高い専門性を身につける「Late Specialization」という学習形態を基本にしています。その一方で、ある程度の専門性を身につけたうえで、それを相対化しつなぎ変える「Late Generalization」のための後期教養教育も重視しています。いずれも「原点」と「座標軸」を組みなおすことで、分野に閉じない広がりを持つ「知」を創りだしてもらいたいからです。

もちろん、原点も座標軸も、世界を理解するための一つの補助線にすぎません。それが唯一絶対の基準のように振る舞いはじめれば、私たちはその基準にとらわれ、高い評価を得ることを目標にしがちです。ほんとうの意味での探究ではなく、その座標軸に適應するだけの思考に縛られてしまいます。世の中で使われている物差しを相対化し、自らの言葉で世界を測りなおす力を持つことが必要です。それは、まさに「原点」を創りだすことにはかなりません。

そのためには、みなさんの隣に座っている未来の仲間たちとの対話が重要になります。誠実で真剣な対話において、私たちはつねに「自分の視点」と「他者の視点」という二つの座標系を行き来することになるでしょう。世界に存在するさまざまな対立や分断も、私たちの身近にあるダイバーシティやインクルージョンをめぐる課題もまた、異なる主観同士の間で距離を測り、互いの座標系を行き来しながら、あるべき世界を創りあげていく、そうした営みによってこそ、解決の道が開かれるのではないのでしょうか。

みなさんには、この東京大学で学ぶ時間を自由に使いながら、それぞれの「原点」が持つ重要性を再発見し、自らの独創的な「座標軸」を磨きあげていただきたい。そして、これまでにない新しい「原点」を引き受ける勇氣を持ってほしいと思います。

みなさん一人ひとりの好奇心と想像力と情熱が、これからの世界に新たな「知」をもたらす源、まさに水が湧き出る「原点」となることを、心から期待しています。

あらためて入学、まことにおめでとうございます。

## 教養学部長式辞



教養学部長

寺田寅彦



※式辞・祝辞の内容はQRコードからご覧ください。

## 来賓祝辞



劇作家・演出家・役者

野田秀樹 様



## 来賓祝辞



東京大学校友会会長

國部毅 様



## 入学生総代宣誓



教養学部

仮野 暁 さん

私たち新生は令和八年度入学生として東京大学に入学できますことを、心より嬉しく思います。本日はこのような盛大な入学式を挙行していただき、誠にありがとうございます。本日この場に立ち、晴れやかな門出を迎

えられたことは、ひとえに多くの方々の支えのおかげです。ここまで私たちを支えてくださった家族や友人、先生方に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

私たちはいま、東京大学での学びに対する期待に胸を膨らませています。先日、1947年に残り7分から始まった「終末時計」は史上最短の残り85秒であると発表されました。世界で立場の違いから分断が広がる中、人類は戦争や環境問題、エネルギー問題といった容易に解決することのできない課題に直面しています。そんな難題山積の時代に我々は何ができるのでしょうか。それは、文化や言語、社会的背景の違いを越えて対話を重ねていくことにあるでしょう。異なる意見に触れる時、私たちはもともと持っていた自分の意見を批判的に検討し、物事をより多角的な視点で捉えられるようにならねばなりません。

幸運なことに、ここにいる私たちは、歴史と伝統ある東京大学という学び舎で、様々な

社会的背景を持ち、深い探究心を持った仲間とともに対話し、思考する機会が与えられています。

私たち新生は、本日ここから未来へと時間を刻み始めます。世界の「残り時間」が語られる時代にあっても、私たちはどのような学びの時間を創り出せるのでしょうか。学問とは、単に知識を積み重ねる営みではなく、未知の世界に触れ、異なる立場を認め合いながらも、人類としての普遍的な共通基盤を見出す営み、世界の針をわずかでも希望の方向へと動かす力を育む営みであると、私は信じます。

この恵まれた環境に身を置くことへの感謝と期待を胸に、私たちはここ東京大学において学びを深め、得られた知を社会へと還元し、より良い未来の実現に貢献できる人間へと成長していくことをここに誓い、新入生代表の挨拶とさせていただきます。



## 令和8年度大学院入学式総長式辞

みなさん、ご入学おめでとうございます。ここに集い、東京大学大学院という、さらなる専門知と研究能力を養う場への新たな扉を開かれたことを、心よりお祝い申し上げます。また、みなさんの努力をあたたく見守り、支えてくれたご家族やご列席の方々にとっても、めでたいこととお慶び申し上げます。

東京大学は、人文学・社会科学から自然科学にまで広がる多様な学問の領域において、未知なる事象や真理の探究に取り組み、基礎研究から応用研究にいたる諸科学の知見を広く社会と共有することを使命としてきました。

しかし、いま私たちが向かいあっている世界は、「激動」という形容では間に合わないほどにめまぐるしく、また大きくゆれ動いています。

80年にわたって紛争の拡大を抑止し、世界秩序を維持してきた国際連合が、かつてない困難な状況におちいっています。戦禍に苦しむ数多くの人びとが等閑（なおり）にされたまま、新たな緊張と紛争の激化が報道されています。世界各地で容易には修復できない対立や分断が深まっている一方で、人類は温暖化や環境破壊など地球規模で解決に取り組まなければならないさまざまな課題にも直面しています。

このように錯綜し混迷する世界のなかで、大学に今なができるか。あるいは、大学で学び、調べ、究め、真理を明らかにしようとする者としてなにをなすべきなのか。あらためて問われているように思います。これは、科学を支えている人間の倫理や公正性にも深く関わる、とても大きな問いです。

だからこそみなさんにも、たじろがず、おそれず、そしてあきらめずに、よりよい社会と学問のあり方について考えていただきたいと思っています。

最近、「夢ハラ」ということばが若い世代で注目されている、という話を聞きました。「夢をもたない」ことを非難されたり、「やりたいことを探さない」と高い目標を求められたりすることを、居心地の悪い押しつけと受けとめる人たちが増えている、ということが背景にあるようです。

たしかに、夢は他人に強制するものではないでしょう。目標にしても、本当に望ましいものだと思えなければ、達成しても空しいだけかもしれません。

しかしながら、夢は未来への駆動力です。仏教では、菩薩は夢をみるが、悟りを得た仏は夢をみないとされているといえます。菩薩はまだ修行中で、迷いがあるからという意味だろうと思いますが、人間もまた常に迷っています。精神分析学者のSigmund Freudが論じたように、夢がいまの自分を支えている価値観のあらわれであり、欲求や願望の表出だとすれば、その声にじっくりと耳を傾けることは大切な学びでもあります。自分の内なる声に耳を澄ますだけでなく、この大学で新たに会う友たちとも、夢や理想を率直に、そして楽しさをもって語りあう時間をつくりだしていただきたいと思います。

豊かさの追求という夢が人びとの間で共通のものであった日本の高度成長期には、耐久消費財の冷蔵庫、テレビ、洗濯機が「三種の神器」といわれました。やがてカラーテレビ、クーラー、車の「3C」を手に入れることが、生活の豊かさを象徴するものとして語られました。その普及は、産業社会の発展にも大きな役割を果たします。

現代ではすでに生活必需品の市場は成熟し、人びとの興味・関心は多様化しています。いままでは新たなテクノロジーが可能にした豊かさを私たちは手に入れています。SNSの地球規模への拡大と、AIの急速な発展によ

て、スマートフォンやコンピュータを通じて接する情報は日常のインフラとなり、かつては考えられなかった便利を当たり前ものにしてつづります。多様な興味・関心を満たすために、つながることのできる人は広範囲にわたり、知りたいことを調べるのも容易になりました。

一方において、私たちはこれまで経験したことがないような困難にも直面しています。日常生活の局面でも、学びや研究の局面でも、情報過多が生み出す新たな問題と、正面から向きあうことになったからです。

たとえば、現代では注目度や関心の高さが経済的な価値を生む「アテンション・エコノミー」の仕組みが発達し、一人ひとりの興味・関心に沿った情報を適応的（Adaptive）に提供することが重視されています。その結果、現在のインターネット空間では、個々のユーザーにそれぞれの好む情報ばかりを提供するアルゴリズムやシステムが、あらゆるところでつくりだされました。気がつかないうちに、同じような情報ばかりを手わたすアルゴリズムは、自分の興味・関心の外側を見えなくする「フィルターバブル現象」をしばしば引き起こします。さらに、自分たちに肯定的な情報ばかりが閉ざされた集団の内側でくり返され、誤りや偏りをふくむ情報が増幅される「エコーチェンバー現象」が起こりやすくなっています。

情報環境の変化だけではありません。私たちの知識や判断力それ自体の、確かさの実感が揺るがされる場面も生まれています。

みなさんもさまざまな場面で、生成AIを使っておられるでしょう。生成AIがしばしば誤った断定や、学習データに起因する偏った応答をおこなうことは、よく知られています。その活用は文章の作成ばかりでなく、画像すなわち視覚的な情報にまで及んでいます。



オンライン会議システムでは、AIによる背景や服装の変更機能がさまざまあらわれてきていますが、それによって「真面目さ」や「知性」などの印象が左右されることが、最近の研究で指摘されています。現実起こっている事件の画像かどうか判定困難な映像が、断片的な事実と一緒に多用されれば、もはや何が事実として正しいのか、本当にわかりにくい状況になってしまうおそれがあります。

歴史上、流言や風説が社会に混乱をもたらした事例は数多くありますが、現在の状況が大きく異なるのは、その即時性と規模です。「怒り」を煽ったり、判断を方向づけたりするために、故意に偽の情報が用いられ、陰謀論のような悪役づくりの物語が仕掛けられることすらあります。これらは社会の分断や排外主義、差別といった深刻な問題にもつながりかねません。多くの国々において選挙がSNSの影響を受け、既存メディアの結果予測を大きくくつがえす事例がめずらしくなっています。すべてのひとの自由の獲得を理念としてきたはずの民主主義の根幹が、いわゆる「フェイクニュース」の蔓延によって、大きく揺さぶられています。

どうすれば、そうした虚偽の情報環境に巻き込まれずに生きていけるのでしょうか。

ただ守ればよい、万能の予防策はありません。まずは、偏った情報環境を自ら認識することは容易ではないというリスクを意識するところから始めるべきでしょう。ひとり不安

と向きあうだけでなく、多様な他者と対話し、さまざまな見方に触れ、ともに検証し考えていくことも重要になります。批判力と分析力と想像力をもって、落ち着いて対処することが大切になるでしょう。大学という、この空間を、そうした対話と交流を生みださうの自由な場として、いろいろな意味で活用し、その意義を実感していただきたいと思います。それは、フィルターバブルによって閉じた扉を開き、自分が巻きこまれているエコーチェンバーに気がつくことにつながっていきます。

個人が孤立し視野が狭くなれば、おのずと夢も独りよがりなものとなります。大きな夢の実現のためには、新たなつながりを求め、他者が何に関心を持ち、何を求めているのかについて深く考える必要があります。タイム・パフォーマンス、いわゆる「タイパ」が重んじられている現代では、無駄だと思われる対話の時間は切り捨てられがちかもしれません。しかし、対話を積み重ねるなかで、自分の夢を見つめなおすことも可能となるでしょう。

私は在外研究のためスイスのヌシャテルという街に一年ほど滞在したことがあります。とりわけ印象に残ったのは、出自も専門も関心も異なる研究者が互いを尊重しながら率直に議論する風土でした。研究の合間のランチに出身国も文化も異なる十人ほどがつどい、研究にかぎらずあらゆる話題について自由闊達に語りあう。そんな場が日常にありました。

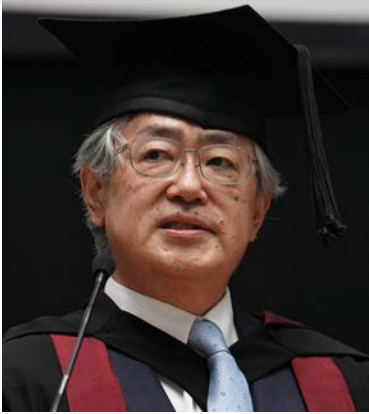
また先日、フランスのマクロン大統領を本学の生産技術研究所にお迎えする、というたいへん光栄な出来事がありました。その主な目的は生産技術研究所に置かれている LIMMS (Laboratory for Integrated MicroMechatronic Systems: リムス) という日仏国際共同ラボの視察でした。そこではフランスからきた多様なバックグラウンドを有する研究者や学生、スタッフが参加して、30年以上の長きにわたって共同研究がおこなわれ、多くの優れた成果が生みだされてきました。私自身も以前に7年間ほど、このラボのディレクターを務めたことがあります。いまでは、このLIMMSをふくめ、異なる研究分野の日仏国際共同ラボが東京大学全体で5つを数え、いずれも国際性豊かな環境で研究がおこなわれています。

みなさんも、これから本学での学びや研究を通し、できるだけ多くの機会積極的に出会いを広げ、多様な人びととつながり、対話してみてください。そうしたなかで、研究を前に進めていく批判力と分析力と想像力を身につけることができるでしょう。みなさんには、創造的地球市民として知の探求への夢とよりよい未来社会への思いを地域や国の境を越えて共有していただきたいと思います。

あらためて、入学おめでとうございます。みなさんのこれからの活躍を心から期待しています。ようこそ、東京大学の大学院へ。



## 研究科長式辞



新領域創成科学研究科長

伊藤 耕一



## 来賓祝辞



国際連合事務次長・  
軍縮担当上級代表

中満 泉 様



※式辞・祝辞の内容はQRコードからご覧ください。



## 入学生総代宣誓



総合文化研究科

杉本 智美 さん

本日はこのような素晴らしい入学式を挙行していただき、深く感謝申し上げます。「新たな知の創造」という志を同じくする仲間と、この恵まれた環境で、研究に精進できることに、入学生一同、深い喜びを抱くとともに、身の引き締まる思いです。また、この場をお

借りして、これまで私たちを支えてくださったすべての方々に、心より御礼申し上げます。

人類が知を積み重ねてきた歴史は、一つの巨大な構造物を建て続ける営みに似ています。そこに積まれた石の一つひとつは、それぞれの時代、それぞれの間に向き合った先人たちの仕事です。今日、大学院での研究の入り口に立つ私たちは、その構造物の前に立ち、次の石を手にしようとしています。そのことの尊さと、それが許された幸運を、まずは静かに受け止めたいと思います。

同時に、一つの問いが浮かんできます。「自らの石、すなわち、自らの研究がいかなる意味を持つのか」——それは、ここに集った私たち全員に等しく突きつけられる問いではないでしょうか。そして、その答えは、研究の歩みの中でしか見えてこないように思います。だからこそ、私たちは歩みを始めなければなりません。

もっとも、石を積む作業は容易ではありません。どこに置けばよいかかわからず、置いて

みても安定しないことの方が多い。それでも、自らの前提や立場を絶えず問い直し、目を背けず向き合い続けること——その地道な積み重ねが、研究の営みの本質であると考えます。

今、世界は複雑さを増し、単純な解を拒む問いが至る所に見出されます。これに、一人で立ち向かうことには、自ずと限界があります。だからこそ、専門を深めながらも、分野を越えて知見を持ち寄り、互いの視点に開かれていること——そうした姿勢が、一人では届かない場所へ、石を積むことにつながると思っています。

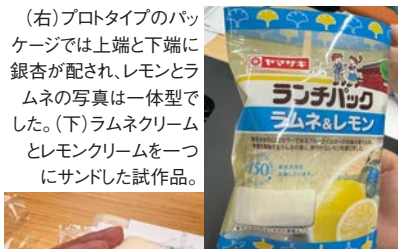
よって、ここに本学入学生を代表して宣誓いたします。学を志す者としての矜持を常に忘れず、先人たちの積み上げてきた学知に深い敬意を払い、真摯な姿勢で研究に取り組むことを誓います。そして、積み上げた知を社会に還元することの責任を自覚し、私たちの営みが、次の誰かが石を積むための足場となることを願い、宣誓の結びといたします。



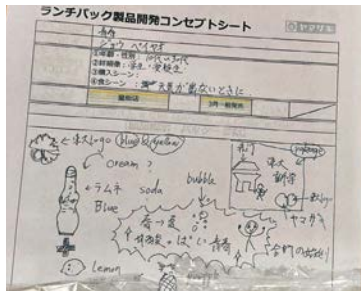
～キャンパスニュース～

# 山崎製パンとの150周年記念事業 コラボで 学生のアイデアが 青春のランチパックに!

東大150周年記念事業の一環として、山崎製パンとのコラボによるランチパックが誕生しました。味とパッケージのアイデアを練り上げたのは、柔軟な発想を備えた学生たち。青春を思わせる青と黄の色彩から生まれた新鮮な商品です。企画を進めてきたブランドスタジオの皆さんに聞きました。



(右)プロトタイプのパッケージでは上端と下端に銀杏が配され、レモンとラムネの写真は一体型でした。(下)ラムネクリームとレモンクリームを一つにサンドした試作品。



Peiyaoさんが提出したコンセプトシートには重要なキーワードが最初から記されていました。



Peiyaoさんが主にデザインを担当した東京大学制作展2025 Beginning「あることないこと」のポスター。  
●Peiyaoさんの作品集 <https://qpynlm.com>



2025年夏に情報学環のオープンスタジオで行われた試食会。



●希望小売価格: 140円(+税)

今回のランチパックは、東大150周年記念事業の一環として開発され、2026年5月～6月に販売されます。売上1個につき1円が寄付され、赤門の修繕費として役立つ仕組み。数あるアイデアの中から選ばれたのは、ラムネ×レモンという組み合わせです。「新鮮で意外性のある味にしたいと考えました」。そう振り返るのは、Qiao Peiyaoさん。中国・西安の大学で建築学やデザインを学んだ後に学際情報学府に進学し、渡邊英徳研究室に在籍する大学院生です。コミュニケーション戦略本部の副本部長であり、ブランドスタジオのStudent Lab長も務めるのが渡邊先生。ディベロップメントオフィスを起点に、ブランドスタジオが中心となって始まった企画に、情報学環25周年記念グッズ制作の際に渡邊先生とともに携わったPeiyaoさんも加わりました。

## あえて敬遠されがちな色を選択

2025年夏には学生有志による試食会を実施。山崎製パン側の説明を聞き、用意された数多のサンプルを囲み、試食しながら

自由に議論を重ねる中で、学生から多彩な案が出てきました。「大人の目線ではどうしても先入観がある。その中で、彼女のアイデアは最初から突き抜けていました」と渡邊先生。Peiyaoさんは、好きな香水のラムネのような香りと東大のロゴカラーから組み合わせの着想を得たそうです。

「青春を思わせる爽やかなラムネの青と、清涼感のあるレモンの黄色。その組み合わせで、フレッシュな活力を表現したいと考えました。食べ物に青は敬遠されがちですが、あまり見たことがないこと自体が魅力になると思ったんです」

当初考えたレモンジャム案も含め、複数の味の方向性が検討されましたが、山崎製パン側の助言を受け、パンとの相性を考えてクリームへと変更。さらに、ラムネとレモンと一緒に入れる案、別々に分ける案など、さまざまな検討が行われました。試作段階では、コミュニケーション戦略課の職員による試食も行われ、味に対して率直なフィードバックが寄せられます。「なかなか辛口で(笑)、改良が必要だと感じました」

と渡邊先生。山崎製パンのサポートのもと、甘みや酸味のバランスを細部まで調整し、ラムネ菓子のようなシャリシャリとした食感を加えることで、爽やかさと食べやすさを備えたランチパックが仕上がりました。

## 学生が手に取る朝を想像して

パッケージデザインでも、Peiyaoさんは多くのアイデアを提案しました。ブランドスタジオのアドバイザーであり研究室の先輩でもある小松尚平さんは、「制約の多い中でも可能性を広げる、きらりと光る提案力がありません」と評価します。当初は桜をモチーフにしたデザインでしたが、販売時期の繰り下げに合わせて新緑へと変更。ラムネ味とレモン味が分かれていることを色と配置で表現したデザインなど、原案は随所に活かされています。「朝、学生がコンビニで青と黄色のパッケージを手に取る風景を想像しながらデザインしました」。Peiyaoさんの描いた青春のストーリーは、東大生協の各店舗や関東全域のローソンで、まもなく現実になります。

(おまけ) 渡邊先生によると、第2弾として「赤門ラーメン」味の検討も始まっているとかいえないか。乞うご期待!

# 一五〇周年記念叢書通史篇 plus

題字：貝田綾子

第1回



すべての歴史は現代史であり、その物語(narrative)は望ましい未来を創出していくための資源です。来る創立150周年に向けて日々進められている年史編纂の現況を、当事者の声を通して隔月で伝えます。

## 通史篇3巻とテーマ篇43巻の編纂が始まっています

百五十年史編纂室長  
佐藤健二



### 編纂室は3人の総長の賜物

百年史の始動は1967年頃ですが、学生運動の高揚による中断期があり、本格再開は75年頃から。77年に刊行が始まり、通史・部局史・資料編の全10巻が揃うには10年を要しました。百五十年史に向けて動き始めたのは、濱田総長時代の終盤からで、当時の筆頭理事(現・編纂室顧問)の佐藤愼一先生が中心でした。組織の重要性を訴え、五神真総長時代の2016年に準備WGが発足。工5号館に部屋を構えて資料整理を始め、2019年に編纂室が設置されました。総長裁量による専任教員配置は藤井輝夫総長になってから。編纂室は3人の総長の賜物です。2021年からは本郷三丁目ビルで活動しています。

百五十年史の本編となる通史篇は3巻構成で、1945年までが対象の第1巻は、菊部直、山口輝臣、鈴木淳、加藤陽子といった先生方が主な書き手です。1946年以降の第2巻と1978年以降の第3巻は、岡本拓司、祐成保志、両角亜希子、阿曾沼明裕、佐藤岩夫、牧原出、宇野重規といった先生方が担当しています。

1・2巻は百年史も扱った期間ですが、

現代の視点からあらためて綴ります。たとえば学生運動は、制度史が主軸の百年史の通史では、あまり十分に触れられていません。当局vs学生の図式で捉えがちですが、学部の立場もさまざま、医学部のやり方を批判する教職員はいたし、学生側の立場も多様。そうした事情を伝える教授会記録などをもとに、一枚岩でなかった部分を浮かび上がらせます。第3巻はここ50年の大学改革の話で、転機は法人化とコロナ。両者を経て大学の活動がどう変わったかが重要な主題です。

### 記念叢書を社会との接点に

大学の活動は多様なため、通史篇だけではカバーしきれません。そこでテーマ篇として刊行するのが『東京大学一五〇周年記念叢書』。百年史の部局史を発展させた形です。横串にこだわるよりも専門領域をよく知る人が部局の特徴を踏まえて書くのがよいと考え、24年から各部局を2巡って部局長と話しました。それを経て43のテーマを決め、担当の先生方が執筆を進めています。編纂室編の4編については全学を見渡して書く形です。

通史篇の第1巻と叢書の数冊は、150周

年式典がある2027年10月までに出版します。編纂室と大学が編集主体となり、版元は東大出版会になる予定。百年史は非売品でしたが、百五十年史は市場に出して社会との接点にと考えています。編纂室の活動は、2027年から3年までにはひと区切りにせざるをえないでしょうから、そこまでには両方も形にしなければなりません。

年史編纂の予算がしっかり用意されているわけではなく、百年史も百周年事業で集めた寄付が原資でした。着手が遅れましたが、百五十年史のための基金を立ち上げようとしています。

すべての歴史は現代史だといわれます。現代の問題意識によって再構成され、現代からの意味づけで浮かび上がるのが歴史。つまり事実の足し算ではなく、過去の事実と現代の関心や価値観との掛け算でできる。だから百五十年史編纂には、全構成員の関心の高まりが必要です。



「百年史は1巻1000頁超えありましたが、一五〇年史は1巻600頁程度と想定しています」(佐藤)



通史篇第2巻の編纂で新たに参照されている文献の一つ『吾が友に告げん：軍裁に問われた東大十六学生の記録』(東大学生記録会、1951年)。「軍事裁判にかけられた学生の事例を紹介されており、これが後のボゴロ事件や60年安保、教養学部の学生運動にもつながったと考えられます」(佐藤)

### 『東京大学一五〇周年記念叢書』(テーマ編)

|                         |                      |
|-------------------------|----------------------|
| 扉は開かれたか：東京大学女性史の試み      | 百五十年史編纂室             |
| 障壁はとりのぞかれたか：東京大学バリアフリー史 | 百五十年史編纂室             |
| キャンパスの中の保育園             | 百五十年史編纂室             |
| 大学における学生生活の歴史           | 百五十年史編纂室             |
| 生きもの力で社会を変える：農学の一五〇年    | 東原和成(農学生命科学)         |
| 司法・法曹養成の制度と政界・官界        | 橋爪隆・阿部直・五百旗頭謙(法学政治学) |
| 体育と競技・スポーツ科学の歴史         | 八田秀雄・寺田寅彦(総合文化)      |
| 教養学部の誕生とリベラルアーツ         | 岡本拓司・寺田寅彦(総合文化)      |
| キャンパス空間の歴史              | 加藤耕一(キャンパス計画室)       |
| 総合図書館改修史                | 坂井修一(附属図書館)          |
| 学術資料デジタル化の歴史            | 坂井修一(附属図書館)          |
| 大学博物館の形成                | 西秋良宏(総合研究博物館)        |
| コロナパンデミックと向かいあう：対応と変容   | 四柳宏(医学系+医科研)         |
| 学問分野の成立：東京大学の源流         | 小島毅(人文社会系)           |
| 情報科学の研究教育の発展と基盤の構築      | 岩田覚・千葉滋(情理+基盤)       |

|                         |                  |
|-------------------------|------------------|
| 海からながみえてくるのか：大海研の六五年    | 兵藤晋・牧野光琢(大海研)    |
| 「もしかする未来」のテクノロジー：回顧と展望  | 年吉洋・林憲吾(生研)      |
| 「学融合」と「知の冒険」：三〇年の軌跡と展望  | 伊藤耕一・清家剛(新領域)    |
| 社会調査とデータサイエンスの展開        | 石田浩・佐藤博樹・佐藤香(社研) |
| アジア学の巨匠たち               | 中島隆博・大木康(東文研)    |
| 史料探訪と歴史情報処理システムの構築      | 井上聡・尾上陽介(史料編)    |
| 東京帝国大学と日本の植民地           | 外村大・寺田寅彦(総合文化)   |
| 予知と減災：地震研究所の一世紀         | 古村孝志(地震研)        |
| 文学者たちの文学部               | 阿部公彦(人文社会系)      |
| 物性研究とはなにか：七〇年のあゆみ       | 廣井善二(物性研)        |
| 学問と外国人                  | 小林真理(人文社会系)      |
| 戦争と学問                   | 納富信留(人文社会系)      |
| 教員養成の歴史と東京大学            | 勝野正章(教育学)        |
| 宇宙はどう研究されてきたのか：宇宙線と数物連携 | 梶田隆章(宇宙線研+IPMU)  |
| プロムナード東京大学事務所起原         | 佐藤健二：百五十年史編纂室    |

|                          |                  |
|--------------------------|------------------|
| 理学が歩んだ五〇年                | 大越愼一(理学系)        |
| 異分野響創：先端研四〇年の進撃          | 杉山正和・牧原出(先端研)    |
| 日本経済の歩みと経済学部             | 稲谷誠・澤田康幸(経済学)    |
| FDとOpen Educationの軌跡と未来  | 浅見泰司(大総センター)     |
| 定量生命科学研究所の誕生：歴史から未来へ     | 白錠克彦・宮島馬(定量研)    |
| 低温科学の発展と研究センターの歩み        | 島野亮(低温センター)      |
| 地域環境データプラットフォーム構築の五〇年    | 沖大幹(地球環境データコモンズ) |
| 軌跡と展望：国家・産業・暮らしを支えた工学の挑戦 | 宮本英昭(工学系)        |
| 脳を考える：脳神経科学のネットワーク       | 池谷裕二(薬学系)        |
| 公共政策大学院の二〇年              | 川口大司・城山英明(公共政策)  |
| 情報学環の挑戦：災害情報と社会情報        | 目黒公郎・関谷直也(情報学環)  |
| 素粒子物理における国際共同実験研究の五〇年    | 石野雅也(素粒子センター)    |
| 空間情報科学の形成と現在             | 関本義秀(空間情報センター)   |

※順不同です。  
※各巻のタイトル等はまだ仮のものです。  
※組織名・編者等の情報を省略して記しています。





## ブランドコミュニケーションという営み

「自分だけが知っている東大の魅力は何か」。柏、本郷、駒場。同じ大学に属しながら、それぞれが全く異なる表情を持つ三つのキャンパス。その違いに触れるたびに感じる東大の奥深さを作文にして、ブランドスタジオの一期生の選考に応募したことを覚えています。その作文をきっかけに飛び込んだブランドスタジオでの半年間は、「伝える」とこの面白さと奥深さを体感できた日々でした。

荒木俊哉さんのコピーライティング研修会では、「What to say (何を伝えるか)」と「How to say (どう伝えるか)」を明確に分けて考えるというフレームワークを学び、感覚に頼りがちであった言葉づくりに、再現性のある手法を与えられたことで、表現に対する向き合い方が大きく変わりました。伝えたい内容を丁寧に言語化し、その届け方を設計するという思考プロセスは、今後もあらゆる場面で活けると感じています。

瀬川浩樹さんの指導の下で取り組んだロゴ制作も、深く印象に残っています。与えられた課題に沿いながら、自分のどのような思いをデザインに込めるかを真剣に考えました。楽しくもあり、難しさもある作業でしたが、ロゴを作ったときは自分の内側が可視化されたような充実感も感じました。東京大学の広報誌(『東京大学の概要』)の表紙コンペへの参加もしました。赤門の写真をどこに配置するか、文字の大きさや配置をどう設計するか、デザインのあらゆる要素に意図が求められることを改めて実感した経験でした。

BEAMS CREATIVEさんとの会議やコミュニケーション本部の打ち合わせへの参加では、第一線で活躍するプロの仕事の間近で体感しました。ホームページ制作の裏側で繰り広げられる議論の密度と、そのテンポの速さには率直に圧倒されました。学生という立場でありながらも、同じ場に身を置けたことは、大きな刺激であり、自分の視野を広げてくれる貴重な機会となりました。

これからは、五月祭での学生企画が目前に迫っています。卒業生の立場とはなりますが、いままで取り組んできたメンバーとともに自分も五月祭を盛り上げていきたいと思っています。



瀬川浩樹さんによるワークショップで生まれたロゴ入り名刺の一つ



Student Labの打ち合わせ兼懇親会にて(右から3番目が筆者)

※筆者の所属・学年は2026年3月時点でのものです。



収蔵する貴重な学内資料から  
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介します

## 魔法書? —ウインドー・アルバムの世界

厚重な革表紙に金属の留め具。まるで古の呪文が書き込まれているさうだと思わず手に取った一冊が、今回紹介する蔵出し資料「アルバム [人物中心]」(F0006/S07/SS01/0008)です。



この資料は、文科大学教授・坪井九馬三(1859~1936)関係資料の一つで、「ウインドー・アルバム」と呼ばれる写真帳です。ページを開くと、額縁にはめ

込まれたかのように肖像写真や集合写真が現れます。

19世紀半ば以降の西欧では、名刺代わりに「カルト・ド・ヴィジット」と呼ばれる小型写真を交換することが流行しました。本資料も、こうした写真を差し込み式の窓に収め、鑑賞・保存できる構造になっています。大きさは縦27.3cm、横21.0cm、厚さ7.4cm。全15枚の台紙には、1ページにつき大判写真1枚、または名刺判写真4枚を収めることができ、最大84枚の写真を収納可能です。しかし実際には、収まりきらなかった写真が、台紙の間に数多く挟み込まれています。

確認できる範囲では、1877(明治10)年から1907(明治40)年頃に撮影、あるいは贈られた写真が収められているようです。そこに写るのは、総長として知られる山川健次郎、後に文科大学長を務めた井上哲次郎、坪井と同年に文学部を卒業し、後に柔道の創始者として知られる嘉納治五郎、そして外国人教師ルートヴィヒ・リースとみられる人物たちです。これらの写真が、どのような意図や意味をもってこの順に並べられたのかを想像することも、この資料の楽しみの一つではないでしょうか。

さらに興味深いのは、三つの窓に押し花が挟まれている点です。留学先で摘まれたものなのでしょう。学問という知の記録の間に差し込まれたそのささやかな痕跡からは、学者としての顔とは異なる、坪井の個人的な思いや時間の気配が感じられます。

このアルバムは、単なる写真の入れ物ではなく、人と人とのつながりや、その場の空気や温度までも封じ込めた一冊の「魔法書」なのかもしれません。(主事員：村上こすえ)



## ワタシのおシゴト 第239回

RELAY COLUMN

社会連携部ディベロップメント課  
戦略チーム

藤森公介

## D課は東大 Loverをつくる



フロア改修でIKEAな空間が生まれました

渉外課は、この4月から「ディベロップメント課」へと改名しました。私は通称として、ひそかに「D課」を推しています。

名前は変われど、仕事の根幹は変わりません。「寄付」です。寄付の現状をまとめた報告書や、寄付者への謝意イベントなどを通じて、教員の研究に対する情熱や学生の挑戦を社会へ届け、永く続く応援へと繋げています。その過程には、大学らしからぬマーケティングの発想やデータ分析、新たな戦略の立案も求められ、難しくも奥深い仕事です。

developmentは、直訳すると「発展」。その語源は「包みを解く」ことだそうです。東大の魅力を紐解き、社会とのつながりを広げながら、大学の成長を支えたい。そんな思いで励んでいます。

ところで最近、大変美味しいクッキーを見つけ、どハマりしています。アメリカンなパッケージで判断せず、ぜひ食べてみてください。おやつの魅力だって、包みを解いてみないと分からないですから。



砕いたカシューナッツを入れるセンス◎

得意ワザ：エチュード（即興劇）

自分の性格：知りたがり

次回執筆者のご指名：山口真次さん

次回執筆者との関係：入職当初から良くしてくれる先輩

次回執筆者の紹介：先輩の中の先輩。人格者。感謝。

## デジタル万華鏡 第51回

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

附属図書館総務課企画渉外チーム  
上席係長

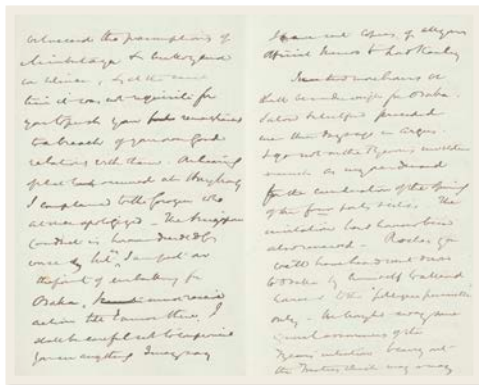
中村美里

## 総合図書館のA.v.シーボルト資料

「シーボルト」と聞くと、鳴滝塾の創設者であり、いわゆる「シーボルト事件」で国外追放を受けたフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトを思い浮かべる人が多いと思いますが、総合図書館の貴重図書として所蔵されているシーボルト関係資料は、彼の長男であるアレクサンダー・フォン・シーボルト（A.v.シーボルト）に関する資料群です。これは大きくTagebücher（日記帳）とBriefe（書簡集）に分けられ、前者は1866年から1882年までの概ね1年1冊の日記（ノートブック）です。後者は、内容もサイズも多種多様、そして量も膨大な紙片群です。内容はA.v.シーボルトが母親に宛てた手紙、日々のことを書いたメモ、受け取った電報、雑誌の切り抜きなど様々なものから成ります。

日記帳と書簡集は、ルール大学ポーフが編集したActa Sieboldianaというシリーズ本で目録や翻刻テキストが公開されています。そして、これまで書簡集の全資料がActa Sieboldianaに掲載されていると考えられてきましたが、本学の石原あえか教授（総合文化研究科）と、関西学院大学教育学部の堅田智子准教授の調査により、何らかの基準で取捨選択が行われ、実は未掲載の紙片が含まれていることが分かってきました。そこで、そのような貴重な資料であることや今後研究に活用される可能性の高さから、2024年度に書簡集全点の撮影を行い、2025年8月にデジタルアーカイブポータル上で一般公開しました。

A.v.シーボルトは幕末から通訳・翻訳官として活躍し、また明治政府のお雇い外国人として長く日本にいた人物であることから、このコレクションには近代日本の歴史や文化を知る上で貴重な資料を多く含んでいます。これまで全貌が見えにくかった紙片群が、デジタル化により飛躍的にアクセスしやすくなりました、どうぞご活用ください。



A.v.シーボルト直筆のメモ

<https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/collection/siebold>

# インタープリターズ・第224回 バイブル

教養教育高度化機構 特任准教授  
科学技術コミュニケーション部門

内田麻理香

## 専門知は「唯一の正解」か

日本では、2005年が「科学コミュニケーション元年」と呼ばれる。その前後から、科学コミュニケーションは政策的な後押しを受け、広く取り上げられるようになった。しかし、その言葉が研究や教育の場に十分に根づいているかという、やや心許ない印象もある。

もちろん、科学コミュニケーションに関心をもち、実践に携わっている人びとも確かに存在する。ただ、関わる主体が多様であるがゆえに、目指す方向や大切にしている価値が少しずつ異なっているのも事実である。「科学を応援してもらいたい」と考える人もいれば、「科学を無批判に受け入れる風潮を見直したい」と考える人もいる。いずれももつともな思いではあるが、場合によってはそれらが対立の要因ともなりうる。

先日、博士論文をもとにした単著、『科学コミュニケーションの再構築——連帯志向の専門知へ——』（勁草書房）を刊行した。本書では、このような多様な目標のあいだに架け橋をかけ、より多くの人が共有できる視点を提示することを目指した。そこで提案したのが、科学コミュニケーションを「残酷さを回避し、社会的連帯を広げる営み」として捉えるという考え方である。

学術の場に身を置いていると、「非専門家が必要な専門知を身につけ、適切に運用さえすれば、社会はうまくいく」と考えたいことがある。しかし、問題の原因を非専門家の無知に求める発想では、科学と社会の関係を把握することに失敗する。

専門知は、ときに他者に対する優越や差別を正当化する手段として用いられてきた歴史をもつ。たとえば、19世紀の性差に関する科学研究は、男女の差異を「科学的証拠」として提示し、男性の社会的優位を正当化する議論と結びつけた。「客観性」をうたう科学研究が内在していた差別の構造は、現在は是正されている。しかし、専門知が絶対視され、それが他者の発言を退ける根拠として用いられる場面は、今も見かける。

むしろ、専門知は重要で、民主主義社会を支える基盤である。しかし、社会の中で特定の専門知が「唯一の正解」となることはない。人は、そして共同体は、さまざまな要件を勘案しながら、「合理的」に判断を下す。科学的でないことが、誤りであるとは限らない。

本書では、誰もが安心して科学についておしゃべりできる環境をいかに実現するかを検討した。科学に言及することが特定の人に限られた営みではなく、より開かれたものとなるためには何が必要か。東京大学の皆様とともに考える機会となれば幸いである。



# ききんの [き]

寄付でつくる東大の未来

第78回

ディベロップメントオフィス  
副オフィス長

堺 飛鳥

## 音楽×対話で共に「想像」をひらく



今年2月15日、創立150周年記念事業の一環として、卒業生の加藤登紀子さん、東大同窓生オーケストラ、さらにゲストピアニストの横山幸雄さんをお招きして、東京大学150周年記念チャリティコンサート「安田講堂で奏でる〈イマジンコンサート〉」を開催しました。本公演は、単に優れた演奏だけでなく、本学が培ってきた知を「次の150年」へつなぐストーリーを体感できる形で、共感を集める試みです。このコンサートの収益は開催経費以外、すべて本学の教育研究活動及び150周年記念事業運営資金に充当されます。感動がそのまま次世代への投資へとつながる構造を、最も理解しやすい形で提示できたことは、寄付文化の醸成に向けた大きな一歩となりました。

最初に講堂内に響き渡ったのは、ラフマニノフの重厚な調べです。使用されたのは、作曲家本人愛用の歴史的なスタインウェイ。団員の長谷川泰さんが保有するこの名器が、卒業生・現役生が一体となったステージを支えました。この学内と学外の連携の姿こそが、卒業生エンゲージメント拡大の象徴であり、大学と社会の絆を太くする力となります。トークセッションでは、佐藤健二執行役・副学長が加藤登紀子さんと「イマジン（想像）」をテーマに芸術と社会の関係を語り、アンダーソンの「想像の共同体」論を引いて、分断の時代に「再び想像し直す」ことの重要性を説きました。加藤さんの平和への願いを込めた詩の朗読、そしてアンコールの「イマジン」へと至る旋律は、大学の役割を「社会が同じ未来を思い描くための土台」として捉え直す契機となりました。

寄付文化の醸成は、「自分もこの未来に参加している」という接点の積み重ねで成立します。今回の公演は、音楽を通じて分断の克服という知的なテーマを提示し、応援を具体化させる場となりました。この日に生まれた共感を、150周年に向けた挑戦を支える確かな原動力へと繋げてまいります。

東京大学基金 <https://utf.u-tokyo.ac.jp>

**トピックス** 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

●お知らせ／前田育徳会創立百周年記念特別展「百万石―加賀前田家が東京国立博物館で6月7日まで開催中です。東大と縁が深い前田家伝来の数々のほか、コミュニケーション戦略本部によるコンテンツも見られます。

| 掲載日    | 担当部署・部局             | タイトル (一部省略している場合があります)  |
|--------|---------------------|---|
| 3月10日  | 人文社会系研究科・文学部        | 八尾史准教授が第22回(令和7年度)日本学士院学術奨励賞受賞  |
| 3月10日  | 本部コミュニケーション戦略課      | 本学研究室のサーバに対する不正アクセスに関するお知らせ   |
| 3月10日～ | 広報室                 | UTokyo研究室発グッズ集(第4回) インクルーシブな社会実現のための人材育成にご支援を「DO-IT Japan基金」 漱石より学生から愛された「ヘルン先生」の読みやすい草稿&蔵書 万博の大屋根リングに込めた都市木造の構想とは?＝腰原幹雄 柏の公道と万博のEVバスでワイヤレス給電の実証実験を展開＝藤本博志/広報誌「淡青」52号より |
| 3月11日  | コミュニケーション戦略本部       | 奇跡の門を未来につなぐ(赤門 Vol.2) 赤門は木と森の文化を伝えている(赤門 Vol.3)   |
| 3月23日  | コミュニケーション戦略本部       | 池は恋愛小説の舞台だった(三四郎池 Vol.1) 大名庭園から現代の憩いの池へ(三四郎池 Vol.2)   |
| 3月11日  | 本部人事企画課             | 「令和7年度東京大学卓越研究員」1名を決定   |
| 3月11日  | 本部コミュニケーション戦略課      | 国際女性デーに寄せて(総長メッセージ)   |
| 3月12日  | 本部研究倫理推進課           | 令和7年度研究倫理セミナーを開催  |
| 3月12日  | 本部社会連携推進課           | 第4回東京大学地域連携シンポジウム 開催報告  |
| 3月19日  | 本部学生支援課             | 東京大学運動会ロゴマークの1次審査、2次審査を実施!  |
| 3月23日  | 本部コミュニケーション戦略課      | 広報誌「淡青」52号(関西号)を発行  |
| 3月23日  | 本部社会連携企画課、本部社会連携推進課 | 浅野アートプロジェクト「東大・浅野キャンパスに美しい穴を掘る」実施報告   |
| 3月24日  | 本部総務課               | 令和7年度東京大学学位記授与式を挙行  |
| 3月25日  | 本部総務課               | 令和7年度東京大学卒業式を挙行   |
| 3月25日  | 本部渉外課               | 新入生応援キャンペーン2026 東京大学基金へのご寄付で限定オリジナルグッズ贈呈!   |
| 3月25日  | 本部社会連携推進課           | 2025年度 フィールドスタディ型政策協働プログラム活動報告会を開催  |
| 3月25日  | 本部社会連携推進課           | 2025年度 体験活動プログラム報告会を開催  |
| 3月25日  | 未来ビジョン研究センター        | 国際シンポジウム「知の協奏: AI×物理」開催報告   |
| 3月25日  | 附属図書館               | Kano Knowledge Portalの公開  |
| 3月25日  | 本部渉外課               | DMG森精機と東京大学が共同記者会見を開催   |
| 3月27日  | リサーチ・アドミニストレーター推進室  | 令和7年度リサーチ・アドミニストレーターの認定   |
| 3月27日  | 本部国際戦略課             | 東京大学グローバル・ナビゲーション・ボード2025年度年次会合を開催  |
| 3月31日  | 教育学研究科・教育学部         | 2025年度 グローバル・リーダー育成、欧州研修プログラムを実施  |
| 4月1日   | 総合文化研究科・教養学部        | 地域文化研究専攻のキハラハント愛教授が国連人権理事会の特別報告者に任命   |
| 4月1日   | 教育学研究科・教育学部         | 個人研究型探究学習を指導する高校教員向け研修への参加校を募集  |
| 4月1日   | 本部コミュニケーション戦略課      | 令和8年度 部局長交代のお知らせ  |
| 4月1日   | 本部渉外課               | 株式会社日本ベネックスとネーミングプランの協定を締結  |
| 4月1日   | 本部渉外課               | Arithmer株式会社とネーミングプランの協定を締結   |
| 4月1日   | コミュニケーション戦略本部       | ハイパーカミオカンデ関連工事における事故の発生について   |
| 4月3日   | 史料編纂所               | 琉球国王家伝来の「琉球国之図」、初のデジタル公開へ   |
| 4月3日   | 本部学生支援課             | 交通安全パレードに応援部が参加!  |
| 4月3日   | コミュニケーション戦略本部       | プロセス検証委員会報告書について  |
| 4月3日   | コミュニケーション戦略本部       | プロセス検証委員会による記者報告会を受けて   |
| 4月7日   | 本部法務課               | 総長選考開始の公示について   |
| 4月8日   | コミュニケーション戦略本部       | 東京大学のガバナンス改革に関する資料について  |

## UTokyo 春色のエコバッグ

知ってた? 2027年に創立150周年の東京大学の記念グッズで人気のエコバッグにピンクあるんだって～! 本郷の安田講堂とか赤門、図書館がモチーフで春っぽくて可愛い～。これ持ってお出かけしたら気分上がりそう。しかも再生ポリエステル生地だから、まさしくエコ! コンパクトで便利だし、今年の春の買い物は、これで決まり! (田)



UTCCからのお知らせ

150周年記念マーク入り  
本郷建物柄  
エコバッグ  
ピンク

3,300円  
(税込)



→オンラインストア



**CLOSE UP グローバル・ナビゲーション・ボードの年次会合を開催** (本部国際戦略課)



本学からは、森山工、矢口祐人、伊藤たかね、マイルス・ベントンの各先生と藤井輝夫総長が発表を行いました。

2月20日、東京大学グローバル・ナビゲーション・ボード (GNB) 年次会合を開催しました。GNB委員は藤井総長によって任命されており、大学、ベンチャーキャピタル、EdTech、NPOなどの幅広い分野で活躍する世界的に著名なエキスパートによって構成されています。GNBは、UTokyo Compassに示された包括的なビジョンに沿って知見・助言を提供いただくことを目的としています。

2025年度の年次会合では、「Designing

the Future of Learning: How UTokyo Can Meet the Challenges of a Changing World」をテーマに、AIと共に生きる社会における未来の学びについて、GNB委員、本学役員、本学の全ての教育部局長とで議論を行いました。また、デザイン思考のワークショップを実施し、学生や教員が置かれている状況と、未来のあるべき姿を考えることを出発点に、本学が輩出すべき人材像や、未来の学びについて理解を深めました。



**CLOSE UP 浅野キャンパスに穴を掘るアートプロジェクトを実施** (本部社会連携企画課 本部社会連携推進課)



穴を掘る様子。講習会では、2000年後に浅野から出土した「穴」の開いた土器について考える作品、浅野で制作したペルーのドーナツ菓子の造形に「穴」を見出す作品、人々の歩みが作り出す軌跡を「穴」と定義した作品など、7作品が発表されました。

3月14日、武田ホールにて、東京大学・東京藝術大学の連携事業「東大・浅野キャンパスに美しい穴を掘る」の公開講習会を開催しました。2025年に締結された両大学の包括連携協定を契機に始動したプロジェクトです。

東京藝大に最も近い浅野キャンパスを舞台に、「ここで何か芸術活動ができないか」という本学・藤井輝夫総長の問いかけに対し、東京藝術大学・日比野克彦学長が「美しい穴を掘る」というコンセプトを提示。両大学の学生が混合チームを結成し、「穴」という概念や「穴を掘る」という行為を再解釈して作

品として提示する試みが始まりました。

3月12日、埋蔵文化財調査を専門とする教員の指導のもと、掘削作業が行われ、直径約6m、深さ約30cmの巨大な「穴」を出現させました。土を掘るだけでなく、歴史的な知見を交えながら土地と向き合うプロセスそのものが、制作の重要な土台となりました。

公開講習会において、学生たちは思索の末に完成させた7つの作品を発表し、藤井総長と日比野学長も作品を体感。キャンパスに突如現れた「穴」を通じ、学生たちの柔軟な発想を体感する一日となりました。



**CLOSE UP DMG 森精機との産学共創で「MXセンター」を開設** (本部渉外課)



握手を交わす 藤井総長 (左) とDMG森精機の森取締役社長

3月9日、DMG森精機株式会社と東京大学は、「マシニング・トランスフォーメーション研究センター (MXセンター)」の開設について、安田講堂にて共同記者会見を開催しました。共同記者会見には、本学から藤井輝夫 総長、加藤泰浩 工学系研究科長、センター長の杉田直彦教授の3名、DMG森精機から森雅彦 取締役社長、入野成弘 執行役員、廣野陽子 執行役員の3名が出席しました。来賓として経済産業省の須賀千鶴 製造産業局産業機械課長兼製造産業DX政策企画調整官 / AIロボティクス推進官に出席いただき、会場には、

経済紙や業界専門紙、テレビ局をはじめ多数の報道機関・ジャーナリストが来場しました。

MXセンターは、DMG森精機からの寄付金10億円による「エンダウメント」の仕組みを活用し、4月1日に工学系研究科内に開設されました。工程集約や自動化、DXでGX (グリーン・トランスフォーメーション) を実現するMX (マシニング・トランスフォーメーション) を産学共創で推進。2050年を見据え、高効率化や省エネ、人材不足解消の研究に取り組み、製造業の課題解決を牽引する拠点を目指します。

\*出席者の肩書は会場当日のものです



**CLOSE UP 部局長交代のお知らせ** 4月1日付で部局長の交代がありました。

|                | 新部局長 | 前部局長 |
|----------------|------|------|
| 大学院工学系研究科長・工学部 | 津本浩平 | 加藤泰浩 |
| 大学院理学系研究科長・理学部 | 田近英一 | 大越慎一 |
| 大学院薬学系研究科長・薬学部 | 浦野泰照 | (再任) |
| 大学院数理科学研究科     | 辻 雄  | 平地健吾 |
| 大学院情報理工学系研究科   | 中村 宏 | (再任) |

|                        | 新部局長 | 前部局長 |
|------------------------|------|------|
| 大学院公共政策学研究部・大学院公政策学教育部 | 谷口将紀 | 川口大司 |
| 東洋文化研究所                | 佐藤 仁 | 中島隆博 |
| 宇宙線研究所                 | 荻尾彰一 | (再任) |
| 物性研究所                  | 小林洋平 | 廣井善二 |

※新部局長の略歴と前部局長の退任挨拶は全学ホームページでご確認を。

●お知らせ / 第99回五月祭が5月16日(土)・17日(日)に開催されます。今回のテーマは「好き」が芽吹くとき。何かを懸けられるひと・ものが集う瞬間を、春の本郷キャンパスでご確認ください。



## 女性活躍の「一丁目一番地」を問い直す

昨今、あらゆる組織において「女性活躍」が最優先事項、いわゆる一丁目一番地の施策として掲げられている。大学・研究の世界も例外ではない。私自身、理系大学教員であり研究者という立場上、女性比率の向上といった役目を頂く機会が多々ある。ハラスメント対応など、同性の視点がなければ不適切な場があるのも事実であり、その役割の重要性は大いにあると思う。しかし、この「活躍」という旗印の下で、現場の研究者が抱える負担が、本来あるべき姿から少しずつ乖離し始めているのではないかという懸念がある。

最大の問題は、絶対数の少ない女性研究者が、学内の運営業務や政府系委員会の役割に奔走し、本業であるはずの研究時間を削られている現状である。女性活躍を推進するための仕事が、皮肉にも女性の研究実績を阻害するという構造的な矛盾が生じている。これでは、次代を担う若手が先輩の背中を見たとき、そこに映るのは憧れの「研究のロールモデル」ではなく、役割に忙殺される「雑用のロールモデル」となってしまう。そのようなキャリアパスを、合理的判断を持つ後継者が望むとは考えにくいのである。

かといって、支援のあり方も一筋縄ではない。例えば、競争的資金などで女性を安易に優遇すれば、同業の研究者たちの間でも「実力ではない」という不公平感を醸成し、

当の女性たちも、そのような視線に晒される立場を敬遠するだろう。結果として、実力主義に基づいた健全な後継者育成を阻むことになりかねない。今求められているのは、単なる数合わせの優遇ではなく、研究者としての本分を支えるための、より大胆なリソース配分ではないか。具体的には、女性限定の巨額な競争的資金の創設や、学内の雑務を免除して研究だけに専念できる特別枠の設置といった、環境への直接的な介入である。忖度ではなく、圧倒的な成果を出すための「投資」として時間や資金を保障することこそが、本質的な支援とならないだろうか。

先人たちの尽力により様々な基盤や環境が整備された段階を経て、今、私たちはその実効性を問われる局面に立っている。単に会議体の席を女性で埋めるだけの形式主義は、かえって研究の現場に歪みを生じさせている。重要なのは、数値目標の背後にある「研究者がその専門性を最大限に発揮できる環境の構築」という本質に立ち返るべきではないだろうか。研究活動の質的向上を目的とした構造改革こそが、名実ともに最優先されるべき「一丁目一番地」と感じるところである。

山口利恵  
(情報理工学系研究科)